東京外大 東南アジア学 Southeast Asian Studies TUFS No. 26, 151-207, 2020

プルボチャロコ著『古典ジャワ文学史入門』（5）

Poerbatjaraka's Kepustakaan Djawa (5)

青山　亨

Toru AOYAMA

東京外国語大学総合国際学研究院

Institute of Global Studies, Tokyo University of Foreign Studies

増井　美佳

Mika MASUI

東京外国語大学外国語学部インドネシア語専攻 2013 年度卒業生

Graduated in Academic Year 2013 from Faculty of Foreign Studies,

Tokyo University of Foreign Studies

訳

訳者まえがき

本稿は、これまで『東京外大東南アジア学』第 20 巻から第 23 巻にかけて掲載してきた「プルボチャロコ著『古典ジャワ文学史入門』」（青山・増井 2015, 2016, 2017, 2018）の続編である。プルボチャロコ（Radèn Mas Ngabèhi Poerbatjaraka）が 1952 年に出版したインドネシア語版『クプスタカアン・ジャワ』（Kepustakaan Djawa）を底本とし、同じくジャワ語版『カプスタカン・ジャウィ』（Kapustakan Djawi）を適宜参照して(1)、日本語訳を作成したものである。インドネシア人のためのジャワ文学史概説という原書の性格を考慮し、日本語訳作成にあたっては、原書を全訳した上で、日本の読者に必要と思われる最低限の説明を訳註で補っている。翻訳の経緯や原書および原著者については第 1 編（青山・増井 2015）の「訳者まえがき」を参照していただきたい。

第 5 編である本稿では、原書の最終章である第 7 章「初期スラカルタ時代」を訳出した。原書の第 7 章は第 61 項から第 84 項までの 24 項で構成されているが、このうち第 61 項ではヨソディプロ 1 世と 2 世の親子、第 74 項ではパク・ブワナ 4 世、第 75 項ではシンドゥサストラ、第 76 項ではクスマディラガ、第 77 項ではアディパティ・アノム

本稿の著作権は著者が保持し、クリエイティブ・コモンズ表示 4.0 国際ライセンス(CC-BY)下に提供します。
https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja

（後のパク・ブワナ 5 世)、第 78 項ではロンゴワルシトの計 7 名の作者を取り上げているので、作品として独立した項を設けて取り上げられているのは 18 作品である。本章で取り上げられる作品はすべて現代ジャワ語で書かれている。

スラカルタ時代は、マタラム王国の都がそれまでのカルタスラからスラカルタに移された 1745 年に始まる(2)。マタラム王国は、王位継承をめぐって内紛が続き、そのたびにオランダ東インド会社の干渉を招いた。第 3 次継承戦争の結果、1749 年に王国はオランダ東インド会社の属国になり、さらに 1755 年のギヤンティ条約によって、スラカルタに王宮を持ちススフナンを称するパク・ブワナ王家と、スラカルタと袂を分かってジョグジャカルタに新王宮を築きスルタンを称するハムンク・ブワナ王家に分裂した。この分裂によってマタラム王国の名は消滅したが、このような政治的な混乱のなかで、文芸活動はスラカルタの宮廷で最後の輝きを放つことになる。本章で取り上げられている「最後のプジャンガ(宮廷詩人)」と呼ばれるロンゴワルシトの死去が 1873 年である。おおむね 19 世紀後半をもって古典ジャワ文学の歴史は幕を閉じたと言ってよいであろう(3)。

19 世紀後半になってオランダの植民地支配が進展するとともに、ジャワ社会の近代化も加速し、文芸活動の担い手は、韻文を基本とする宮廷詩人から散文を基本とする都市の知識人、ジャーナリストに移って行き、文学作品の主たる言語もジャワ語から、オランダ領東インドの共通語であったマレー語（のちのインドネシア語）へと移っていくのである。

原書が刊行された 1950 年代は、インドネシア共和国が成立したばかりの時であるが、スラカルタの王宮はいまだ命脈を保っていた。そのため、原著者は、スラカルタの王宮の成立から 19 世紀までを扱った第 7 章を「初期スラカルタ時代」と名付けたと推測される。

本章で扱われる作品を含むジャワ語文献全般については Pigeaud（1967–70）、Uhlenbeck（1964)、Ras（1992）が参考になる。インドネシア語によるジャワ文学の概説として Edi Sedyawati et al.（2001）がある。スラカルタ王国における古典文学の全容を知るには Florida の研究（1995）と目録（1993, 2000, 2012）が有益である。この時代のジャワ社会の歴史的背景を知るには Ricklefs によるインドネシア史概説（2008）および一連の歴史研究（1974, 1998）がある。Ricklefs（2008）の第 5 章はジャワ語文学の概観としてもまとまっている。なお、本来は原書第 6 章「イスラームの時代」を扱った第 4 編

（青山・増井 2018）で記載しておくべきであったが、文芸活動におけるイスラーム化には古典マレー文学が重要な役割を担っており、Winstedt（1969, 1991）の研究が参考になる。

最後に、本稿の訳文については深見純生氏から貴重なコメントをいただいたことに謝意を表したい。また、本稿は、『東京外大東南アジア学』第 24 巻（2019 年）に掲載する予定であったが、学務のために時間を取ることができず、第 26 巻（2020 年）に掲載されることになったことをお詫びしたい。

訳文について

1. ジャワ語およびインドネシア語のラテン文字表記について、原書では旧綴りが使われているが、本稿では現行の新綴りに統一した。ただし、旧綴りで刊行された出版物の題名や著者名などはそのままにした（例えば、本書の表記は、新綴りではPurbacaraka著*Perpustakaan Jawa*となるが、旧綴りのまま）。
2. 第7章では現代ジャワ語の作品が取り上げられているので、ラテン文字表記については、原則として現代ジャワ語の標準的なラテン文字表記方式に準じている。カタカナ表記にあたって、母音の長短は区別せず一律に短母音で表した。母音 è と é は「エ」で表した。曖昧母音（シュワ）を表す ě は小さな「ゥ」もしくはウ段の音で表記した（例えば、těmbang「トゥンバン」、sěkar「スカル」）。なお、dh と th は、古ジャワ語の表記では有気音を表すが、現代ジャワ語の表記では反舌音を表すことに注意が必要である。カタカナ表記にあたって反舌音の dh と th を歯音の d と t と区別することはしなかった。
3. 標準的な現代ジャワ語の発音では、語末の開音節の a は /o/ と発音され、さらに、語末から2番目の音節も開音節の a である場合、その a も /o/ と発音される（例えば、Poerbatjarakaはpoerbaとtjarakaの複合語なので、それぞれこの規則が適用されて/purbocaroko/と発音される）。本稿では、原則として綴りのとおりにカタカナ表記とした（例えば、Paku Buwana「パク・ブワナ」、Haměngku Buwana「ハムンク・ブワナ」、macapat「マチャパット」）が、すでに一般的となっている人名、地名、用語など（例えば、Yasadipura「ヨソディプロ」、Ranggawarsita「ロンゴワルシト」、Sala / Solo「ソロ」、krama「クロモ」、bědhaya

「ブドヨ」）には慣用のカタカナ表記を採用した。

4. 標準的な現代ジャワ語の発音では、上記の特徴に加えて、3音節以上の単語の第1音節の a はしばしば曖昧母音（シュワ） ĕ で発音され、そのように表記されることがある。本稿では、一律にこの規則を適用せず、文脈に応じて表記を使い分けた（例えば、sangkala / sĕngkala は「スンカラ」、「スンコロ」とはせず「サンカラ」、Mangkunagara / Mangkunĕgara は「マンクヌガラ」、「マンクヌゴロ」とはせず「マンクナガラ」。）。

5. 古ジャワ語の名称と現代ジャワ語の（とくにワヤンにおける）名称が異なる場合でも、統一はせず、文脈で使い分けた。代表例として古ジャワ語のラーマ Rāma と現代ジャワ語のラマ Rama の表記がある。ただし、ラマをロモと表記することは原則として行わなかった。

6. 原註と訳註を区別するため、原註については註の冒頭で《原註》と表記した。註の中に原註と訳註が混在する場合には、後者にも《訳註》と表記した。

7. 簡単な訳註については、文の流れを損なわないよう配慮しつつ、訳文自体に補足したり、丸括弧で挿入したりした場合もある。

8. 原書の中では、作品の作成年代がジャワ暦（イスラーム・ジャワ暦）で表示されているものがある。ジャワ暦は、サカ暦の紀年を引き継ぎながら、一年の周期及び月を純太陰暦であるヒジュラ暦にあわせたジャワ独自の暦である。サカ暦はインド起源の太陰太陽暦で、年数に78（または79）を加えたものが西暦の年数に対応する。イスラーム化する以前のジャワの宮廷で使われており（ヒンドゥー・ジャワ暦）、バリ島では現在も西暦と併用されている。イスラーム化したジャワでは、17世紀前半にマタラム王国のスルタン・アグンがジャワの暦をサカ暦からヒジュラ暦に基づくジャワ暦に変更した。西暦の1633年7月8日（サカ暦1555年、ヒジュラ暦1043年）がジャワ暦1555年元日とされた。この年以降のジャワ暦は、サカ暦の年を引き継いでいるが、一年の周期及び月はヒジュラ暦に従っている点に注意が必要である。本文のジャワ暦については、年数から512を引いてヒジュラ暦の年を算出した上で、西暦に換算したものを併記した。ヒジュラ暦から西暦への換算にはIslamic Philosophy OnlineのDate Converterを利用した（http://muslimphilosophy.com/calconv/）。

9. 本章ではジャワの王族や貴族の称号が多数使われている(4)。原則として原書の

記載にしたがってカタカナ表記にしているが、ロンゴワルシトのように頻出する人名の場合は、初出時を除き称号の表記を省略した。

10. 本章では、現代ジャワ語の敬語スタイルのうち、ンゴコ（ngoko）を「常体」、クロモ（krama）を「敬体」と示した。

第7章で取り扱われる著者および作品

原書の第 7 章では項の見出しに著者名と作品名が混在している。そのため本稿では両者を区別できるよう著者名の項には「*」印を付け、その項で言及されている作品を「—」のあとに列挙した。なお、第 7 章の導入部でも作品が扱われているので、同様に取り扱った(5)。

第7章　初期スラカルタ時代
—ウィワハ
61　*キアイ・ヨソディプロ1世・2世
—ウィワハ、ラマ
62　ブラタユダ
63　パニティ・サストラ
64　アルジュナ・サスラ（別名ロカパラ）
65　ダルマスニャ
66　デワ・ルチ
67　メナック
68　アンビヤ
69　タジュサラティン
70　チュボレック
71　ババッド・ギヤンティ
72　ササナ・スヌ
73　ウィチャラ・クラス
74　*シヌフン・パク・ブワナ4世
—ウラン・レ、ウラン・スヌ
75　*キアイ・シンドゥサストラ

—アルジュナ・サスラバウ、パルタヤドゥニャ、スリカンディ・マグル・マナ、スンバドラ・ラルン、チェケル・ワネン・パティ

76 *カンジュン・パンゲラン・アルヤ・クスマディラガ
—ジャガル・ビラワ、リンガ・プラ、スマル・ジャントゥル、サストラ・ミルダ

77 *カンジュン・グスティ・パンゲラン・アディパティ・アノム（パク・ブワナ5世）
—チュンティニ

78 *ラデン・ガベヒ・ロンゴワルシト

79 パラマヨガ

80 ジタプサラ

81 プスタカ・ラジャ

82 チュンポレット

83 ババッド・プラユット

84 ババッド・パクプン

関連年表（第7章に関連する17世紀末～19世紀中葉の主要な出来事）

1675-81 年　トルナジャヤの反乱。

1680 年　マタラム王国がカルタスラに遷都。

1686–1703 年　スラパティの反乱。

1703 年　アマンクラット 3 世がマタラム国王に即位（アマンクラット 2 世の子、在位 1708 年まで）。

1704 年　オランダ東インド会社に支援されたパク・ブワナ 1 世（幼名プグル、アマンクラット 2 世の弟、アマンクラット 3 世の叔父）がマタラム国王に即位（在位 1719 年まで）。第 1 次ジャワ継承戦争が勃発（1708 年まで。敗れたアマンクラット 3 世はスリランカに流刑）。

1719-23 年　第 2 次ジャワ継承戦争。この年、パク・ブワナ 1 世が死去し、子のアマンクラット 4 世が即位（在位 1726 年まで）。反乱が続き、オランダ東インド会社の支援を得て鎮圧。

1726 年　パク・ブワナ 2 世が即位（在位 1749 年まで）。

1729 年	ヨソディプロ 1 世が生まれる。
1740 年	バタビア（現ジャカルタ）で華僑虐殺事件。華僑騒乱が中ジャワに波及（1744 年まで）。
1745 年	マタラム王国がスラカルタに遷都。
1746-57 年	第 3 次ジャワ継承戦争。
1749 年	マタラム王国がオランダ東インド会社の属国となる。同年、パク・ブワナ 3 世が即位（在位 1788 年まで）。
1755 年	ギヤンティ条約が成立。マタラム王国はスラカルタのパク・ブワナ王家とジョグジャカルタのハムンク・ブワナ王家に分裂。後者では、ハムンク・ブワナ 1 世が即位（在位 1792 年まで）
1757 年	スラカルタのパク・ブワナ王家からマンクナガラ王家が分立する。
1788 年	パク・ブワナ 4 世が即位（在位 1820 年まで）
1802 年	ロンゴワルシトが生まれる。
1803 年	ヨソディプロ 1 世が死去。
1811-1816 年	ヨーロッパでのナポレオン戦争の余波でイギリスがジャワを統治。
1813 年	ジョグジャカルタのハムンク・ブワナ王家からパク・アラム王家が分立する。
1819 年	ロンゴワルシトがスラカルタ宮廷に出仕する。
1820 年	パク・ブワナ 5 世が即位（在位 1823 年まで）
1823 年	パク・ブワナ 6 世が即位（在位 1830 年まで）
1825-1830 年	ディポヌゴロの反乱（ジャワ戦争）。
1830 年	ジャワで政府栽培制度が開始（1860 年以降、段階的に廃止に）。この年、パク・ブワナ 7 世が即位（在位 1858 年まで）
1844 年	ヨソディプロ 2 世が死去する。
1845 年	ロンゴワルシトがプジャンガ（宮廷詩人）に任じられる。
1848 年	中ジャワで大飢饉。
1851 年	バタビアにジャワ医学校、スラカルタに師範学校が開設。
1855 年	ジャワ語・ジャワ文字の新聞がスラカルタで発刊。
1858 年	パク・ブワナ 8 世が即位（在位 1861 年まで）
1861 年	パク・ブワナ 9 世が即位（在位 1893 年まで）

1873 年　　ロンゴワルシトが死去。

第 7 章　初期スラカルタ時代

—『ウィワハ』

初期スラカルタ時代の文学作品は 2 つの時期に区分される。第 1 の時期は「翻案」（pembangunan）[6]の時期と呼ぶことができるのに対し、第 2 の時期は新作が創られた時期である。

「翻案」期の作品とは、古い時代の作品をマチャパット（macapat）[7]形式の韻律によって翻案ないし改編したものである。例として、ジャルワ（jarwa）[8]版の『ウィワハ』（Wiwaha）が挙げられる。本作品の冒頭部はアスマラダナ（asmaradana）の韻律で始まる。以下はその一部の引用である。

> Ri sĕdhĕng amurwa tulis, Dité panca likur wulan, Jumadilawal ing ĕBé, tasik sonya giri juga, sangkala duk kinarya, kakawin tinĕmbang kidung, ingaran asmaradana //.

訳：

> この作品を書き始めたのは、日曜日、25 日、ジュマディラワル月（ヒジュラ暦の第 5 月）、べの年（Bé、ウィンドゥ暦の第 6 年）[9]、サンカラ（sangkala）[10]で tasik-sonya-giri-juga（大洋-空寂-山脈-唯一=4-0-7-1）、すなわちジャワ暦 1704 年（西暦 1778 年）のことであった[11]。カカウィンの作品をアスマラダナ形式の韻律で詠んだ。

伝承によると、この作品は、西暦 1749 年に即位し西暦 1788 年に崩御したシヌフン・パク・ブワナ 3 世（Sinuhun Paku Buwana III）[12]によって編纂されたということである。

古ジャワ語（原書では「カウィ語」[13]）で書かれた原作と比較すると、このジャルワ版『ウィワハ』の価値は、可もなく不可もないと言えるが、それは、現代のジャワ人が古ジャワ語版『アルジュナ・ウィワーハ』（Arjunawiwāha）のあらすじをすでに知っているからである[14]。しかしながら、細かに検討してみると、本作品の作者には古ジャワ語の知識が僅かしかなかったことが明らかである。多くの部分が推測に基づいて書かれているばかりか、時には逸脱している部分もある。ただ、このようなことが起こるのは無理からぬところである。なぜならば、その当時は古ジャワ語を学んだり、分析したりする手段は皆無であったからである。したがって、その実態がどうであれ、ここまで成し遂げた努力は評価すべきであろう。

パク・ブワナ 3 世が著した『ウィワハ』が読者に好まれない理由としては、本文中に言葉の繰り返しが多く、まるで裁縫で何度も縫い直しているような感じだからである。

この『ウィワハ』は『ミンタラガ』(Mintaraga)の名でも知られるが、ヘーリック(J. F. C. Gericke)によってジャワ文字に翻字され、オランダ語での解説が加えられて 1844 年の VBG 第 20 巻で刊行されている[15]。

61 *キアイ・ヨソディプロ 1 世・2 世(Kiai Yasadipura I, II)[16]

—『ウィワハ』、『ラマ』

初期スラカルタ時代におけるジャワ語文学の翻案を発展させた立役者として、キアイ・ヨソディプロ(Kiai Yasadipura)[17]1 世と 2 世の父子という 2 人の大家をあげなければならない。ヨソディプロ 2 世はのちにラデン・トゥムングン・サストラナガラ(Radèn Tumĕnggung Sastranagara)の名で呼ばれる人物である。

この 2 人の大家は長きにわたり共同創作を行ったため、どの作品がどちらの著作であるのかを判別するのは非常に困難となっている。筆者にとってもこれは大変な難題である。言語や韻律(kidung)[18]の微妙な違いから検討しようにも、成立時期にもほとんど差異がなく、またスタイルにおける相違点もほぼ見られない。なんといっても 2 人は親子だからである。したがって、筆者はここでヨソディプロの作品に言及する場合には、基本的に両者を一括りで扱うこととし、どちらの作品であるかが判明している時に限って、その都度、明示することとする。

ヨソディプロもまた古ジャワ語の『アルジュナ・ウィワーハ』の翻案を行っている[19]。翻案の冒頭はダンダングラ(dhandhanggula)の韻律で始まる。以下がその内容である。

> Pratisthaning budi amartani, anèng tyasing pandhita kang limpad, mring kawruh kasunyatané, mungkur mring pakarti dur, ...

訳:

> 聡明な聖者の心の中にある、空(くう)に関するその完全なる智慧は悪しき行いを退けるであろう....(後略)

本作品はパク・ブワナ 3 世の作品と比較すると、より耳に心地よいものとなっている。しかしながら古ジャワ語の作品と比較すると、この作品は正しい解釈を求めて手探りで執筆を進めたような印象を与える。しかし、このような比較を別にすれば、本作品は十

分に優れた作品と言ってよいだろう。

本作品はすでに W. パルメール・ファン・デン・ブルック（W. Palmer van den Broek）博士により、1868 年にバタビア（現在のジャカルタ）の国営印刷局から出版されている。

本作品と同時期に、本書の第 1 章第 2 項で解説した古ジャワ語の『ラーマーヤナ』（Rāmāyaṇa）もヨソディプロによって翻案されている。しばしば推測を重ねながら翻案をしたかのような箇所も見られるが、このジャルワ版『ラマ』（Rama）は現代におけるジャワ語文学中で最も優れたものであるといえる。というのも、ヨソディプロは、原作の理解できなかった部分は省略し、物語の筋を変えない形で改編することで、非常に読み易くしているためである。修辞法の使い方についても同様のことが言える。

しかし、物語に必要不可欠で削ることができない部分も、ヨソディプロの理解不足により、手探り状態になっており、しばしば概略のみとなっているように思われる。その結果、解釈にも誤りが生じることになる。このようなことは、すでに先に述べたように、ヨソディプロには、自分自身の頭脳以外に古ジャワ語を学ぶ手段もなかったのであるから、致し方のないことであった。他に古ジャワ語を学ぶ手段がなかったのであるから、その成果が不十分なのも当然のことであった。

ヨソディプロが韻律形式の文章の創作に長けていたのは、ひとえに当時、存在していた古ジャワ語の作品をたくさん読み込んでいたからに他ならない。

ヨソディプロによって書かれた『ラマ』はすでに何度か出版されている。例を挙げると、ウィンテル（C. F. Winter）による VBG 第 21b 巻（1846–47 年）のジャワ文字での出版、ファン・ドルプ（Van Dorp）社から出されたジャワ文字での出版がある。ラテン文字に翻字されたのはバライ・プスタカ（Balai Pustaka）から刊行されたもののみである。

ジャルワ版『ラマ』の冒頭ではダサムカ（Dasamuka）[20]兄弟の修行にまつわることや王宮について語られている。この部分は古ジャワ語版『ラーマーヤナ』には見当たらない。第 1 詩章第 1 詩節から第 13 詩節にかけては『アルジュナ・ウィジャヤ』（Arjunawijaya、別名『サスラバウ』Sasrabau）からの引用である[21]。『ラーマーヤナ』の本体の物語は第 13 節から始まり、以下がその内容である。

kuněng wontěn winurcita, ratu luwih praja’di kang maděg aji, sang prabu Dasarata.

訳：

昔むかしある大きな国に、ほかに比肩する者がいない王があった。その名はダサラタ王（Dasarata、ラマの父親）といった。

見たところ、ヨソディプロの著した『ラマ』がウィンテルによって出版されたとき、すでに何者かによって新たに挿入された部分があったようである。例えば、第 13 詩章第 2 詩節の gandrung-gandrung amangun kung ...「この恋しさは愛を募らせる、これほどまでに」から第 7 詩節の Dhuh yayi mring pundi masku「いとしいあなたは何処へ」までの 5 詩節は新しく挿入された部分である[22]。

第 11 詩節から第 14 詩節にかけても同様である。さらに、第 14 詩章第 2 詩節の Jalalatan mulat nganan ngéring ...「目を見開いて左右を見る」から第 10 詩節の mangsah gandrung-gandrung「恋しさと戦う」までの 9 詩節も新しく挿入された部分である。第 14 詩章の第 12 詩節から第 15 詩節の途中までの部分も挿入された部分である[23]。また、ジャワ人にもっとも好まれている第 18 詩章の Gandrung-gandrung kapirangu「いとしさ募る、愛する人よ」の部分や、第 18a 詩章[24]の Tuhu tan kěna winarni「まことに、言葉にできない」の大部分は、新しく挿入された部分である。新しく挿入された部分は、すべてをここで紹介するにはあまりにも多すぎる。

これらの部分が新しく挿入されたと判断できるのは、これより古い『ラマ』であるカンジュン・パンゲラン・バリタル（Kangjěng Pangéran Balitar）[25]が著した作品（Brandes-Rama No. 605）の中にこれらの部分が存在しないからである。また、スカル・アグン（sěkar agěng）[26]の韻律で書かれたジャルワ版『ラマ』（Ms. B. G. No. 589）[27]の中にもこれらの部分は見当たらない。ちなみに、この写本 No. 589 はマチャパット韻律の作品から作られたもの、すなわち、マチャパット韻律の作品がスカル・アグン韻律の作品に改変されたということである。

62 ブラタユダ（Bratayuda）[28]

本作品もヨソディプロの作品であり、すでに本書の第 2 章第 22 項で解説した古ジャワ語の『バーラタユッダ』（Bhāratayuddha）の翻案である。翻案の方法は前述の『ラーマーヤナ』の場合と変わらない。やはり、正しい解釈を求めて手探りで執筆を進めたような印象を受ける。しかしながら、『バーラタユッダ』は『ラーマーヤナ』よりも後代の作品であるため、言語もより分かりやすくなっている。そのため、原作の解釈におい

てもさほど的外れではなくなっている。したがって、この『ブラタユダ』は、『ラマ』と『ラーマーヤナ』との関係に比較すれば、より原作の『バーラタユッダ』に近いと言える。

ところどころで解釈を誤っている例があり、以下に紹介する。まず、古ジャワ語版の第 10 詩章第 6 詩節には次のように書かれている。

> Kunang tawuri sang nṛpeng Kuru yakāri lūd brāhmaṇa, rikan sira śināpa sang dwija sagotra matya'laga.

訳：

> クル国の王のための犠牲はバラモンであった。このために、王はそのバラモンによって、すべての親族もろとも（sagotra）戦争で命を落とすという呪いを受けたのであった。

ジャルワ版『ラマ』第 12 詩章第 5 詩節には次のように書かれている。

> ... prabu ing Ngastina, tawurira pandhita sagotra'nak putunèki, apan kinarya, tawur Ngastina nĕnggih.

訳：

> ハスティナ国の王のための犠牲は僧侶であった。サゴトラ（Sagotra）はその子、孫ともども、まことにハスティナのための犠牲となった。

実のところサゴトラ（sagotra）を人名とする誤解は長く続いてきた。ワヤンの演目 Balé si Gala-gala（炎上する小屋）の中では、サゴトラとは、結婚したばかりなのに妻の愛を得ることができなかったある武人（bambang）の名前である[29]。

アルジュナのおかげでようやく妻の愛を得ることができたサゴトラは、将来バーラタユッダの戦いが起こった時には喜んで自らを犠牲にする、という誓いをパーンダワたちに対して立てる。

同様のことが、古ジャワ語の第 16 詩章第 7 詩節で語られているジャヤッドラタ（古ジャワ語 Jayadratha、現代ジャワ語 Jayadrata）が頭を矢に射たれて最期を迎えるというエピソードについても言える。それは、tĕka mara ye kisapwani bapanya kagyat atĕmah sirah juga.「父親の膝に（kisapwani）到達したとき、父親は驚愕した。なぜなら、頭しかなかったからである」の部分である。ここで、ye kisapwani bapanya という部分が、yeki sapwani

bapanya と区切られてしまったため、ジャルワ作品の中では、サプワニ（Sapwani）はジャヤッドラタの父親の名前となってしまった。このサプワニ尊者はワヤンの物語の中ではスンパニ（Sĕmpani）と呼ばれている。

誤りは、ガトートカチャ（古ジャワ語 Ghaṭotkaca、現代ジャワ語 Gatotkaca）が、敵の将軍カルナ（古ジャワ語 Karṇa、現代ジャワ語 Karna）に挑むために、別れを告げる場面にもある。以下は古ジャワ語版第 18 詩章第 2 詩節からの引用である。

> kuněng apan ewĕh anggrahatane gati karya tĕmĕn. Si tutu tatanpa nanggaha mĕne'ki gĕgöng sakarĕng.

訳：

> 重要な任務を全うするのは本当に荷が重く感じられるが、従順な者はそのようなことを決して考えることはない。今、私が目指しているのはこのような状態である。

ここで、si tutu tatanpa「従順な者は…」の部分は、古ジャワ文字において t と k の文字がしばしば混同されるため、si tutuka と読まれて、ガトートカチャの名前として解され、ラデン・トゥトゥカ（Radèn Tutuka）になり、さらには、ラデン・トゥトゥルカ（Radèn Tutruka）になったのである。

このほかにも誤りがあるのは、サルヤ（Salya）王が戦闘で死去したとき、后のサティヤワティ（Satyawati）妃が召使から報告を受けた時の場面である。古ジャワ語版の第 44 詩章第 1 詩節には Wontĕn bhrĕtya kaparcaya'tuha ya ta'jar i sira. ...「年配の信頼された召使がやってきて、彼女（サティヤワティ）に伝えた」とある。Tuha ya ta の部分は直訳すれば「その年配の者」の意であるが、この作品では、マンダラカ（Mandaraka）の宰相トゥハヤタ（Tuhayata）という人物になっている。これは、もし間違いでなければ、ワヤンの芝居では緑色の顔をした人形である。

同様に、パンチャ・ワラ（Panca Wala）も本来であれば、パーンダワ 5 人兄弟とドラウパディー（古ジャワ語 Draupadī、現代ジャワ語 Drupadi）の間の 5 人の子供を指すのだが、ワヤンの芝居では 1 つの人形で表されている。

他にも、サーティヤキ（古ジャワ語 Sātyaki、現代ジャワ語 Satyaki）の息子の名前とされるサンガ・サンガ（Sanga-sanga）にも誤りがある。実際には、サーティヤキの息子の名前は言及されておらず、サーティヤキの息子の数は 9 人であると述べられているの

みである。正しい読み方は Sang asanga（「九人の者たち」の意）である。

もう一つの例としてニルビタ Sang Nirbita がある。これは人の名前ではなく、「恐れを持たない」という意味であり、ウィラータ（古ジャワ語 Wirāta、現代ジャワ語 Wirata）王に与えられた表現である。しかし、ワヤンの芝居では、ニルビタはウィラータ王の孫だとみなされている。

以上で見てきたような例は、『ブラタユダ』の中には大変に多い。しかし、物語の全編を読み通してみれば、このような誤りはほとんど気になるものではない。というのも、ヨソディプロによる『バーラタユッダ』から『ブラタユダ』への翻案は、本当に美しく仕上がっているからである。

上に述べたような些細な誤りを別にすれば、むしろ、われわれジャワ人はヨソディプロに対して感謝しなければならない。なぜなら彼の『ブラタユダ』を通して、たとえ簡略化されたものであれ、『バーラタユッダ』の内容を知ることができたからである。

この作品はすでに幾度か出版されている。まず、1856 年、コーヘン・ストゥアート博士（A. B. Cohen Stuart）によりジャワ文字で刊行された。その後、VBG 第 28 巻（1860 年）において刊行された。なお、オランダ語での解説は第 27 巻に収録されている。

以上のほか、スラカルタのディルジャアトマジャ（Dirdjaatmadja）から 1901 年と 1908 年に全 3 巻でジャワ文字により刊行されている。第 3 巻にはカリマタヤ（Kalimataya、ブラタユダの戦争後のパーンダワ兄弟の最期を描く）の物語が収録されている。これはロンゴワルシト（Ranggawarsita）の作品をラデン・マルタダルサナ（Radèn Martadarsana）が韻律詩に改変したものである。

63 パニティ・サストラ（Panitisastra）[30]

この作品は実のところ、すでに本書の第 3 章第 33 項で解説した古ジャワ語作品『ニーティシャーストラ』（Nītiśāstra）をジャルワ版に翻案したものである。

ここでは、D. L. ムニール（D. L. Mounier）博士の解説から引用することにする。この解説は、ヨソディプロの活躍時代にまだ近い西暦 1843 年（スラカルタにおいて、パク・ブワナ 7 世の在位中）に作られたものである。ムニール博士の解説はおおむね以下のとおりである。

『パニティ・サストラ』はジャワ暦 1725 年（西暦 1798/99 年）に古ジャワ語からカウィ・ミリン（Kawi-miring）様式に翻案された[31]。その後、ジャワ暦 1735 年（西暦 1808/09

年）にジャルワ[32]による作品が創られた。1746 年（西暦 1818/19 年）になってラデン・パンジ・プスパウィラガ（Radèn Panji Puspawilaga）によって散文形式に改編されているが、これはあまり念入りに創られた作品ではない。

カウィ・ミリン様式による作品を創ったのはヨソディプロ 1 世であり、ジャルワによる作品を創ったのはラデン・トゥムングン・サストラナガラ（別名ヨソディプロ 2 世）である。この二つの作品の内容はほぼ同じである。

この解説によると、ヨソディプロ 1 世と 2 世が『ニティサストラ』（Nitisastra）の翻案を行ったことも分かるが、『パニティ・サストラ』とのはっきりした区別は現在まで検討されていない。

ムニール博士によって翻訳された『パニティ・サストラ』には、以下の詩章が含まれている[33]。

1. ダンダングラ（dhandhanggula） — 10 詩節
2. シノム（sinom） — 16 詩節
3. ガンブ（gambuh） — 10 詩節
4. ポチュン（pocung） — 19 詩節
5. ダンダングラ（dhandhanggula） — 14 詩節
6. キナンティ（kinanthi） — 20 詩節
7. アスマランダナ（asmarandana） — 18 詩節
8. シノム（sinom） — 15 詩節
9. ジュル・ドゥムン（juru dĕmung） — 9 詩節
10. ダンダングラ（dhandhanggula） — 19 詩節

上にあげた『パニティ・サストラ』の写本は現在ライデンに保存されている。私の推測では、ジャワにはほとんど残されていないようである[34]。

この他にも、『パニティ・サストラ』の写本が存在している。これはダンダングラの韻律のみによる 97 詩節から成っている。以下が、その冒頭の部分である。

> Makirtya ring agnya narpasiwi, nular pralampitaning sang wusman, ing Surakarta wĕdharé, nĕm catur gora ratu, ri sangkala wit ning winarti, Nitisastra ingaran,

winarna ing kidung, kawi kadanging sajarwa, lumaksana sasananing kang janma'di, yan iku kadriyana.

訳：

王子（narpasiwi）の命を成し遂げるべく、詩聖ウスマンの例に倣って、スラカルタにおいて編纂が、サンカラで něm-catur-gora-ratu（ジャワ暦 1746 年）に始まった。『ニティサストラ』と名付けられたこの作品は、ジャルワに近しいカウィの韻律（キドゥン）の形式をもつ。こうすることで祖先の場所を得ること、それが望みだ。

この冒頭部はムニール博士の解説の冒頭部と類似している。以下がその部分である。

オランダ語：

Om den last van Vorstenzoon te volbrengen, breng ik de voortreffelijke gelijkenissen over, te Surakarta uitkomende in 1735 (tata-tri-gora-ratu) (A.D. 1808), in welk jaar zij voor het eerste verkondigd worden, Nitisastra werden zij genoemd, uitgedrukt in kidhung of dichtmaat, en als ware eene broer van de Djarwa of verklaring.

訳：

王子（Vorstenzoon）からの下命を成し遂げるべく、私はその優れた寓話を翻案した。スラカルタにおいて完成し、ジャワ暦 1735 年（tata-tri-gora-ratu）（西暦 1808 年）に初めて朗唱された。それは『ニティサストラ』と名付けられ、キドゥン、すなわち韻律詩で表現されている。言うなれば、ジャルワ（つまり、ジャワ語による解釈）の兄弟のようなものだ。

ダンダングラの韻律からなる上記の『パニティ・サストラ』にはサンカラで něm-catur-gora-ratu、すなわちジャワ暦 1746 年（西暦 1818/19 年）の紀年がある。

一方、ムニール博士による翻訳には tata-tri-gora-ratu、すなわちジャワ暦 1735 年（西暦 1808/09 年）の紀年がある。したがって、二つの間には（ジャワ暦で）11 年の差がある。ムニール版の『パニティ・サストラ』は 10 詩章 143 詩節で構成されている。

これらを検討してみると、ムニール版の『パニティ・サストラ』がジャワ暦 1746 年

（西暦 1818/19 年）に、ダンダングラで書かれた『ニティスルティ』(Nitisruti) [35]に倣って、全編がダンダングラのみからなる作品に改編されたのであろう。

ほかの『パニティ・サストラ』には、ダンダングラの韻律が 61 詩節、シノムの韻律が 34 詩節、すべて合わせて 95 詩節が収められている。以下がこの作品の冒頭部からの引用である。

> Mĕmanising panĕmbah pamuji, kang minangka pandoning wardaya, mring kang karya ngalam kabèh, baka kodrat puniku, ingkang sipat rahman lan rahim, kang murba amisésa, jagat isinipun, ping kalih marang utusan, Kangjĕng Nabi Muhammad ingkang sinĕlir, myang kula warganira.

訳：

> 祈りと賛美の本質とは、心の導きとなるよう、(第一に) 全世界の創造主にして、全能にして、最も慈悲深く、そのすべてを支配している主に対してなされるものであり、第二に、神の使徒にして、主によって選ばれし預言者ムハンマドおよびその一族に対してなされるものである。

上述の冒頭部はクルアーンの第 1 章「開端」(Al-Fātiḥah) をジャワ語に翻訳したものである。このような表現は、イスラーム化したジャワ語文献の冒頭部の慣行に従っているだけではなく、古ジャワ語の文献の冒頭部にあるヴィシュヌ神への崇拝の言葉を置き換えるものである。翻訳の仕方は手探りの状態で行ったようにみられる。

もし私の記憶が正しいとすれば、ジャルワ版『ニティサストラ』はすでに出版されている。なぜならば筆者は幼少時代にこの作品を読んだことがあるからである。しかしながら、現在では、この文献に出会うことはなくなった。

64 アルジュナ・サスラ、別名ロカパラ（Arjunasasra、別名 Lokapala) [36]

この作品もヨソディプロ 2 世の作品である。本書の第 3 章第 30 項で取り上げた『アルジュナ・ウィジャヤ』(Arjunawijaya) に準拠している。冒頭部は以下のとおりである。

> Purwaning rèh pandoning mĕmanis, makirtya ring agnya prabwatmaja, ri Surakarta mandirèng, Jawi sahananipun, ping patbĕlas Rĕspati Manis, Jumadilawal astha, gathitanya nuju, Jimakir sèwu kalawan, pitung atus catur sat (1746) mangka palupi,

prabu Sahasraboja.

訳：

事の始まりはと言えば、このすべての美しきものに関する手引きは、ジャワにあるスラカルタにおける王子の命によって、14 日、木曜日、（五曜の）マニス日[37]、ジュマディラワル月（ヒジュラ暦の第 5 月）…、ジマキルの年（ウィンドゥ暦の第 8 年）、（ジャワ暦の）1746 年（西暦 1819 年）に、『サハスラ・ボジャ王』[38]（の物語）を手本として創作がはじめられた[39]。

文中の王子（prabwatmaja）とは、カンジュン・グスティ・パンゲラン・アディパティ・アノム（Kangjěng Gusti Pangéran Adipati Anom）[40]、すなわち、のちのパク・ブワナ 5 世（Paku Buwana V）のことで、本書でも何度か言及される。

本作品『アルジュナ・サスラ』には、系譜はもちろん、スグリワ（Sugriwa）とスバリ（Subali）の物語も含まれていない[41]。なぜなら、このような要素は原典にも含まれていないからである。本作品『アルジュナ・サスラ』の中では、聖仙ウィスラワ（Wisrawa）が邪まな行為をする者として以下のように語られている[42]。ある日、自分の息子であるダナラジャ（Danaraja）王から、妃にふさわしい女性を探すことを任されるが、見つけ出した女性を自らの妻にしてしまったというものである。このような内容は古ジャワ語版にはまったく見当たらない。

しかしながら、そのような背信的行為を聖仙ウィスラワがしたとなぜ語られるようになったのかについてはまだ研究がなされていない。

65 ダルマスニャ（Darmasunya）[43]

本作品もヨソディプロ 2 世の作品である。原典は本書の第 3 章第 35 項で解説した『ダルマシューニャ』（Dharmaśūnya）である。すでに述べたように、『ダルマシューニャ』のテキストはかなり破損しており、意味が不明瞭な部分も多い。

このような状態の作品が古ジャワ語の知識についてはそれほど卓越しているとは言えないヨソディプロの手で、マチャパットの韻律形式でジャルワ作品として翻案されたのである。したがって、マチャパット版『ダルマスニャ』の意味も筆者にとって不明瞭であることは、述べるまでもないであろう。幸いにも語られる内容は神秘的な事柄なの

で、意味の不明瞭さはかえって作品の美点を増大させている。見たところ、この作品は、ジャワの伝統的秘儀（イルム・クバティナン[44]）の伝承に含められているようである。秘儀を信奉する者たちにとっては、謎めいた意味をもつこの「秘儀書」は、絶妙にして真正なものとみなされている。逆に、秘儀に詳しくない者、ましてや、明瞭明晰な事柄を重んじる者にとっては、このような書を読むのは鬱陶しいことであろう。

『ダルマスニャ』の結末部分には、これがヨソディプロ 2 世の作品であることをはっきりと示す章句がある。以下がその部分である[45]。

> Tĕlas ulun akarya palupi, angétung basa winor kalawan, ing kawi kauwusané, wusnya anulat ingsun, Darmasunya binasan kawi, kawilĕtaning raja, agama linuhung, ri mangkya ta ingkang karsa, narpaputra kinarsakakĕn asalin, binasan jarwa Jawa.
>
> Duk kawiné pu Yogiswarèki, kang amarna pandhita sudibya, wicaksana trus tingalé, ing mangkya kang amangsul, basa kawi dhatĕng ing Jawi, Yasadipura ping rwa, dahat mudha punggung, mĕhĕng lumakwèng sapakwan, jĕng sang hulun sang maha narpatisiwi, dibya ing Surakarta.
>
> Kauwusan ngwang amanulat sri, wuryan tama rasaning kamuksan, ri Salasa pétunging lèk, kaping sanga anuju, wulan Siyam ĕJé kang warsi, sangkala naya marta, maharsi manangkung, mwang tèki amrih aksama, sanggyaning kang sudy'arsa kanang muryani, wuryaning arjaningrat.

訳：

> 古ジャワ語（原文では「カウィ語」）で語られた言葉に（現代の）ジャワ語を混ぜて、ここに作品を私は完成させた。(古の) 王によって流麗に語られ、崇高な教えに満ちた、古ジャワ語で書かれた『ダルマスニャ』をジャルワのジャワ語に移し変えることが王子の意図であったからである。
>
> ヨギスワラ（Yogiswara）という偉大で見識豊かな僧侶が著した古ジャワ語の作品を、古ジャワ語から（現代の）ジャワ語に移し変えるのは、いたって青二才の愚鈍なヨソディプロ 2 世であるが、これもただ、スラカルタにおわす偉大にして崇高な王子の命令に従ってのことである。

この美しい作品を書き終えたときの私はあたかも忘我の境地にあるようだった。その日付は、火曜日、「断食の月」（ヒジュラ暦の第 9 月であるラマダン月）の 9 日、ジェの年（Jé、ウィンドゥ暦の第 4 年）、サンカラは、naya-marta-maharsi-manangkung であった。私は知りたいと欲すすべての人に許しを請い、世界の安寧が訪れるよう祈る。

以上に挙げた文中には、サンカラが含まれており、naya-marta-maharsi-manangkung、すなわちジャワ暦 1742 年（西暦 1815 年）[46]である。したがって、本作品は『パニティ・サストラ』（本章第 63 項）と同時期に創られたことになる。

また、『ダルマスニャ』で言及されている王子（narpatisiwi）は、『パニティ・サストラ』で言及されている王子（Vorstenzoon）と同じ人物、すなわち、のちにパク・ブワナ 5 世として即位する、カンジュン・グスティ・パンゲラン・アディパティ・アノムである。

『ダルマスニャ』はすでに 1921 年にバタビア（ジャカルタ）においてウィデャ・プスタカ（Widya Poestaka、神智学協会 Theosophical Society によって 1909 年に設立された組織）からジャワ文字で刊行されたが、誤植が多い。上に挙げた引用部分に見られる例をあげておく[47]。

narma putra	正しくは	narpa-putra
Yogisurèki	正しくは	Yogiswarèki
Yasadidura	正しくは	Yasadipura
mětěng	正しくは	měhěng
sakapun	正しくは	sapakwan

なお、『ダルマスニャ』をヨギスワラの作品とするのはまったく荒唐無稽な説である。

66 ジャルワ版デワ・ルチ（Déwaruci Jarwa）[48]

ヨソディプロは本書第 5 章第 42 項で説明した『デワ・ルチ』も現代ジャワ語のジャルワに翻案している。哲学的な思想を含んだ部分は省略されているため、もとより短い作品である。

この作品はスラカルタ宮廷のブドヨ（bědhaya）舞踊の女性斉唱の歌詞のなかに用い

られている。以下が内容の引用である。

//o// ----o----- //o/ /

Ĕla-ĕla paměngkuning rèh sapraja

ri sangkala pawaka ro wiku raja

ri sang Bima kalanira puruhita

mring sang Druna minta sampurnèng dumadya.

Duryudana ginuběl mring pra arinya,

rěmpěg'turé sakèhing sata Korawa

aminta pitulung sang Dwijawara.

//o// lajěng minggah //o//

Pinituwa sadaya pěpěk ing ngarsa

Druna prabu Mandraka'dipatyèng Wangga,

Dhanyang Druna saguh mring sang Kurunata,

anyirnakna marang sira Arya Bima,

aja lawan aprang sirna saking cidra,

tan antara praptanira Arya Séna

dyan jumujug měndhěg němbah mring sang Dibya/

//o// měndhěk němbah-mungěl gěndhing Gambirsawit,

mawur ing tyas Maha Prabu Duryudana.

訳：

//o// ----o----- //o/

王国一円の領域を支配するお方が、

Pawaka-ro-wiku-raja（火-2-僧-王）、すなわちジャワ暦 1723 年[49]（西暦 1796/97 年）に（おわす時にこの詩が創られた）。

その時、ビマは解脱を求めドロナに師事していた。

ドゥルヨダナはコラワの 100 人の弟たちから一斉に頼られていた。

そして、僧侶の最上たる者（ドロナのこと）に助けを求めた。

//ここで調子が変わる[50]//

マンドラカ国の王、ワンガ国の領主など、長老たちが居並ぶ前で、

ドロナは、クルの王（ドゥルヨダナのこと）に約束した、

ビマを亡きものにすることを、

ただし戦さではなく、騙すことで亡きものにせんと。

ほどなくして、セナ（ビマの別名）が到着し、

法力ある師のもとに進み出ると、膝を屈して礼拝した。

//「膝を屈して礼拝した」で、ガムランの調子がガンビルサウィットになる。

大王ドゥルヨダナの心は当てにならない。

この引用中にはサンカラの記述もみられる。pawaka-ro-wiku-raja、すなわちジャワ暦 1723 年（西暦 1796/97 年）である。したがって、ヨソディプロがカウィ・ミリン様式による『パニティ・サストラ』を著した時とは 2 年の違いということになる。

またこの作品にはスカル・アグンの形式をとる部分がある。作品の冒頭部で、内容は以下のとおりである。

Nihan karananiran doning ulun rumancanèng

sotanirang kata diwya, ri lagu magĕng,

mamrih mardawa pragnya rikang manah

lalu saniskara, juwĕt silarjèng tuwuh anané

ri kahanan jati, sujana nindita, paramartèng rat,

witaning tumuwuh, winahya tĕkang sasmita winardya.//

訳：

私がこの霊妙な言葉による作品をスカル・アグンの韻律であらわそうと試

みたそのわけは、心に安らぎが訪れ、あらゆる困惑が消え去り、繁栄があることを求めてであり、さらに、真正なあり方、優れた学識、世界の高貴なありよう、生の根源が、ここに顕現し、その徴の意味が明らかになることを求めてである。

この作品の結末部でもサンカラの記述があり、malĕtiking-dahana-goraning-rat、すなわちジャワ暦 1730 年（西暦 1803/04 年）である。

最近の研究によれば、スカル・アグンの韻律で書かれた『デワ・ルチ』は、マチャパットの韻律で書かれた『デワ・ルチ』から逆に作られたものである。つまり、マチャパット韻律の作品が先に書かれて、その後、スカル・アグン韻律の作品が編まれたのである。同じことは『ラマ』（Ms. B. G. No.589）のところでも述べたとおりである(51)。

スカル・アグンの韻律で書かれた『デワ・ルチ』の作品は他にもある。以下に、冒頭部を引用する。

Nihan doning ulun séka-ri agnyaning sang narpatmajèng Jawi, ri kanang mandhirèng prajèng Surakrta mangung rèh Bima-suci, mamrih mardawèng tyas.

訳：

ジャワの地のスラカルタ国の王子より、『ビマ・スチ』の物語を記せとの仰せを受けて、私は、心に安らぎが訪れるよう（この作品に取り組む）。

この引用文中に見られる sang narpatmajèng Jawi（ジャワの王子）の字句は、『パニティ・サストラ』の中でも言及されている。したがって、ここで取り上げた『デワ・ルチ』はカンジュン・グスティ（パク・ブワナ 5 世）の命を受けたヨソディプロ 2 世によって書かれたと確定することが可能である。

マチャパット韻律で書かれた『デワ・ルチ』はすでに頻繁にジャワ文字で出版されている。最も早いのはファン・ドルプ社によって 1870 年に刊行されたもので、続いて 1873 年と 1880 年に刊行された。なお、出版者はガベヒ・クラマパウィラ（Ngabèhi Kramapawira）であるが、作品がヨソディプロの著作であることにはまったく触れず、あたかも自身の作品であるかのように述べられている。

その後、1922 年にガベヒ・マングンウィジャヤ（Ngabèhi Mangunwijaya）によって『デワ・ルチ』は再版された。これには、序文が追加されており、そのなかでこの作品はもともと古ジャワ語のスカル・アグンの韻律で書かれ、原作者はマムナン（Maměnang）

国、すなわちクディリ（Kědhiri）国のウムプ・ウィダヤカ（Ěmpu Widayaka）であり、ウムプ・ウィダヤカとはアジ・サカ（Aji Saka）のことである[52]、云々と述べている。

改めて述べるまでもないが、このような説明はまったくのでたらめである。

ヨソディプロ作の『デワ・ルチ』の冒頭は、ラデン・ウルコダラ（Radèn Wrěkodara、ビマの別名）が、ドロナに対して生命の水（toya-marta）を探すことの許しを願い出る場面から始まる。おそらく、この当時、ヨソディプロは、この場面を含む『デワ・ルチ』の原典を手にすることができたのであろう。

すでに第 5 章第 42 項で解説した古い『デワ・ルチ』においては、物語はラデン・ウルコダラが海に向かって出発する場面からただちに始まるので、生命の水の探索というエピソードは、古い文献ではすでに欠損していたと考えられる。

ここまでで取り上げた古ジャワ語から翻案された現代ジャワ語の諸作品は、古ジャワ語を知る者にとってそれほど意味のあるものではないが、古ジャワ語を知らない者にとって、ひいてはジャワ文学の発展にとって、大変に有意義である。なぜなら、今後とも、古ジャワ語を習得して古ジャワ語の作品から翻案を創るジャワ人が幾人もいるとは思われないからである。

67 メナック（Ménak）[53]

この作品も、翻案による作品に分類されるが、原典はこれまでの作品とは異なる。作者はヨソディプロである。ヨソディプロ版の『メナック』はすでに第 6 章第 56 項で解説したカルタスラ版の『メナック』と同一の内容であるが、言葉や韻律はヨソディプロによって手が加えられており、より美しいものとなっている。しかしながら、「時は金なり」として急ぐことをよしとする現代社会では、すでにこのような作品を好んで読もうとするものは多くない。特に若い世代においてこの傾向は顕著である。文章が長いということ以前に、若者のなかに、自分たちの言語であるジャワ語をよく知らない者が増えていることがその理由である。

この『メナック』は、ラデン・ガベヒ・ジャヤスブラタ（Radèn Ngabèhi Jayasubrata）[54]によってすでに出版されている。全 7 巻から構成され、スマラン（Semarang）のファン・ドルプ社から刊行された。

また、近年、バライ・プスタカから、薄い冊子に分冊された形で再版されており、全部で索引をふくめて 46 巻ある。

残念なことに、バライ・プスタカ版『メナック』はイスラームの宣教的要素を含む部分をすべて省いてしまっている。

これら以外にも、さらに古いものであるが、内容は完全とは言えないものとして、1854年にバタヴィアでウィンテルによって出版されたものがある。

68 ヨソディプロ版アンビヤ（Ambiya）(55)

ヨソディプロはすでに第6章第59項で解説した『アンビヤ』も翻案している。この作品（Ms. B. G. No.10）の中にはサンカラの記述があり、janma-tri-goraning-aji、すなわちジャワ暦1731年（西暦1804/05年）である。

69 タジュサラティン（Tajusalatin）(56)

この作品の原典は、マレー語の作品『マフコタ・スガラ・ラジャ・ラジャ』（Mahkota Sĕgala Raja-raja、「王たちの冠」の意）である。これをヨソディプロが、ヒジュラ暦1139年、ジャワ暦1726年にマチャパット韻律のジャワ語に翻案したものである（Ms. B. G. No. 582）(57)。

『タジュサラティン』はすでに幾度か出版されており、1873年と1875年にスマランで、1905年にスラカルタで、1922年にスラカルタでルッシェ（Rusche）版が刊行されている。

以上で解説してきたヨソディプロの作品はすべてジャワ文学の翻案作品に分類される。次からは新しく創作された作品を解説する。

70 チュボレック（Cĕbolèk）(58)

この作品は、チュボレック（Cĕbolèk）の名で知られるハジ(59)・ムタマンキン（Haji Mutamangkin）にまつわる出来事を語っている。この人物は、犬を飼うなど、イスラームの戒律を破った。そのため、クドゥス（Kudus）の説教師アノム（Anom）を先頭とするジャワ全土のウラマーによって弾劾され、事件はシヌフン・パク・ブワナ2世（Sinuhun Paku Buwana II、在位1726年～49年）の治世期のカルタスラ（Kartasura）の裁判所（Pradata）に持ち込まれた。裁判では、チュボレックはすでに悔い改め、アノムとの討論にも敗れたので、判決は赦免となった。

『チュボレック』の作品の中では、『デワ・ルチ』、『ウィワハ』などの諸作品が事件のアクセントとして詳しく語られている。マンクブミ王子（Mangkubumi、後のスリ・スルタン 1 世 Sri Sultan I）についても語られており、修行を楽しみ、稲の疫病と戦ったことが語られている。

この作品の優れている点は、その人物描写の方法である。生き生きと描写されている上に、描写が明確である。例えば、ラデン・ドゥマン・グラワン（Radèn Dĕmang Ngurawan）は眉目秀麗で、勇敢である上、弁舌なめらかな大物といった具合である。

『チュボレック』はすでにスマランのファン・ドルプ社から 1886 年にジャワ文字で出版されている。最近になって再版されたとの話もある。

71 ババッド・ギヤンティ（Babad Giyanti）[60]

この作品『ババッド・ギヤンティ』は国の分割にまつわるババッド（史伝書）である[61]。以下がその内容である。

華僑の騒乱によって荒廃したカルタスラからスラカルタに王宮が遷都したのち、封土を大幅に減らされたマンクブミ（Mangkubumi）王子は王宮を離反した。ここにマンクブミとスラカルタ王宮との間で戦争が勃発した。この戦争で、マンクブミは、不平をもつ他の諸侯たちから大いに支持された。特に、マンクナガラ王子（Mangkunagara、サンブル・ニャワ Samběr Nyawa）はマンクブミ王子に対し忠誠を示した。このため、マンクナガラ王子はマンクブミ王子によって最高司令官に任じられた。

マンクブミ王子の戦法はまず、スラカルタ王国の外側の地域から屈服させていくものであった。一方のマンクナガラ王子は戦さの中でマンクブミ王子から次第に離れてゆき、最終的には敵対するようになった。ともあれ、マンクブミ王子とスラカルタ王宮との対立はジャワの地が二つの国に分裂する原因となった。

マンクブミ王子は、マタラムのガヨグヤカルタ（Ngayogyakarta）[62]の王宮の王となり、カンジュン・スルタン・ハムンク・ブワナ 1 世（Kangjěng Sultan Haměngku Buwana I、ジョグジャカルタの初代スルタン）を称した。

スルタンの有力な家臣には、敵対する前のマンクナガラのほか、アディパティ・プグル（Adipati Pugěr、マルタプラ Martapura）、トゥムングン・プラウィラディルジャ（Tuměnggung Prawiradirja）、トゥムングン・スルヤナガラ（Tuměnggung Suryanagara、スワンディ Suwandi）などがいる。

マンクナガラ王子は、当時スラカルタ王国を支援していたオランダ東インド会社によって、スラカルタに服従するよう命ぜられた。

スラカルタに服従したマンクナガラ王子は、その後、マンクナガラ 1 世（Mangkunagara I、スラカルタのマンクナガラ王家初代の王）の地位に就いた。

この戦争がようやく終焉を迎えたのは、パク・ブワナ 3 世（Paku Buwana III）の治世になってのことであった。

『ババッド・ギヤンティ』の言語表現は、『チュボレック』と同様に秀逸である。登場人物一人一人の描き分けが明瞭で生き生きとしている。ヨソディプロの人物描写の見事さはたしかに称賛に値する。

『ババッド・ギヤンティ』はすでに H. ブニン（H. Buning）によってジャワ文字で、1885 年、1886 年、1888 年、1892 年に 4 巻本で出版されている。また、最近になって、バライ・プスタカから小冊子に分冊された『ババッド・ギヤンティ』が出版された。

72 ササナ・スヌ（Sasanasunu）(63)

この『ササナ・スヌ』はヨソディプロ 2 世による作品である。内容は、ヨソディプロが生きていた時代のジャワ・イスラームのもとでの生き方に関わる教えである。この教えは、以下のように 12 章に分かれている。

> 我々生きとし生けるものは以下のことを常に念頭に置かなければならない：

1. 我々は神によって人間たらしめられていること
2. 食べ物や衣服に恵まれていること
3. 収入を得るのは必ず自らの労働によってであること
4. 神の命令で、私たちは預言者ムハンマドにしたがってイスラーム教徒でなければならないこと
5. 衣服と嗜みのこと
6. 交友関係の結び方
7. 食事、睡眠、立ち振る舞い、外出に関すること

8. 客に敬意を払うこと

9. 言葉や意見を表に出すこと

10. 偉大な人あるいは卑小な人になること

11. 地位の降下や運命の変化の理由にかんすること

12. 世界の動きを知らなければならないということ

ここに示した 12 章からなる教えが、耳に心地よい韻律形式で、分かりやすい言葉で説明されている。

私見では、『ササナ・スヌ』で説かれる教えに、『ラーマーヤナ』で説かれる教えを付け加えれば、人生における十分な備えとなる。このような教えに従うことで、この世の苦難をまぬがれる可能性が大きくなると考えるのだが、まずは試してみるのがよいだろう。

『ササナ・スヌ』にはサンカラによる紀年があり、sapta-catur-swarèng-janmi、すなわちジャワ暦 1747 年（西暦 1819/20 年）である。また、すでに 2 度、出版されており、2 回目は 1928 年、S. M. ディワルナ（S. M. Diwarna）書店から出版された。ただ、この版は、学術的視点から見ると、優れたものとは言えない。なぜなら、異本との照合がなされておらず、一つの底本にしか基づいていないからである。

このような理由から、字句の乱れがある。例えば、第 1 章第 2 節の tuwuh tarlèn sĕkarira は、異本によれば、tuwuh tarlèn sakariya とするのが正しく、「人生はまさにそれ（人生の安寧を指す）に他ならない」という意味になる。

続いての節には tumulun という語があるが、正しくは tumuluy である。これは古ジャワ語の tuluy「続ける」に由来する。第 6 節では barang rusti という語句があるが、正しくは barang gusti である。これは、古ジャワ語の goṣṭhi「議論する」に由来する。詳しく検証すれば、このような誤りはさらに多く見つかるであろう。

73 ウィチャラ・クラス（Wicara Kĕras）(64)

この作品『ウィチャラ・クラス』もヨソディプロ 2 世の教えを収めている。「強い言葉」という意味の題名がすでに内容を表わしており、その当時のスラカルタの混乱した状況を目にし、苛立ち、憤慨している著者の心情が込められている。

まず、はじめに、aja dumèh wong gĕdhé「身分のある者だからといって…」という文言から始まり、以下のように続く。

Ngaku turun Brawijaya, ora sakti.

Ngaku anak pandhita, ora bĕtah ngĕlèh.

Ngaku anak pujangga, ora wĕruh[65] pa siji.

Ngaku anak sujana, nalaré liwar.

Ngaku anak ngulama, ora bisa ngaji.

Ngaku anak cina, ora kucir.

Ngaku anak santri, ora bisa maca Kulhu.

訳：

ブラウィジャヤ[66]の子孫と言いつつも、霊力がない。

僧侶の子と言いつつも、空腹に耐えられない。

プジャンガの子と言いつつも、字が読めない。

学者の子と言いつつも、思考が冴えない。

ウラマーの子と言いつつも、クルアーンが読めない。

中国人の子と言いつつも、辮髪にしていない。

サントリ[67]の子と言いつつも、「純正」章[68]の朗唱もできない。

続き：

….yèn ngaku sutèng raja, pĕsthi nalaré patitis, yèn anaking kaum pĕsthi bisa ndonga.// Lamun ora mangkonowa, sayĕkti liniron bĕlis, duk ibuné pulang raras, lawan bapakané nguni, sétan kang amomori, yèn ora iku blĕkuthur, mulané karĕm sasar, mbĕlasar arda mĕnthalit, sĕsétané anjahili padha bangsa.//

Mung karĕmé dèn gunggunga, dèn alĕma yèn asigit, tĕlèdhèk ajimprak-jimprak, panganggĕpé widadari, yèn kasaliring thithik, padha bangsa nuli padu, datan nganggo ukara, sĕsumbar acĕrik-cĕrik, yèn wania pĕrang mangsa mangkonowa.//

Mung waniné padha bangsa, dèn réwangi takĕr pati, jamak wong ngaku prawira, kaya Sultan Mangkubumi, atapa tur undhagi, ing wiwéka gothak-gothuk, micara tan sikara, pasaja nalaré mintér, lamun aparang padha Jawa nora arsa.//

訳：

王の子であれば、当然に聡明で、ウラマーの子であればお祈りができるはずだ。//もしそうでないなら、彼の中に悪魔がいるのかもしれない。その昔父君と母君が契りを結んだ時に、悪魔が紛れ込んだか。さもなくば、初めから、道に外れたことを好み、悪魔のように、同じ民族（であるジャワ人）に悪意を持つのである。

人に褒められ、もてはやされることのみを望み、みずからをあたかも美しく踊る天女であるかのように思い込んでいる。少しでも気に障ることがあれば、すぐに同じ民族（であるジャワ人）同士で喧嘩をする。決して話し合おうとはせず、傲慢な態度をとる。もしも本当に戦う勇気があるのならこのような振る舞いはするまい。//

同じ民族（であるジャワ人）を相手に武勇を誇る。勇敢な戦士という呼び名にふさわしいのは、スルタン・マンクブミのように、聡明で修行をいとわない者である。作戦においては常に慎重で、決して言葉で人を傷つけず、質素で、思慮深く、ジャワ人同士で敵対することを望まない。

そして、以下のように続く。

身分のある者たちは、ワヤンの演目やその他の時代の作品おいて、もし善人であれば褒め称えられ、悪人であれば徹底的に批判される。

『ウィチャラ・クラス』の続編は『オンデ・オンデ・パティ』（Ondhé-Ondhé Patih）(69)である。本作品『ウィチャラ・クラス』はすでに出版されているが、現在ではほとんど目にすることはない。

74 *シヌフン・パク・ブワナ 4 世（Sinuhun Paku Buwana IV）(70)

―『ウラン・レ』、『ウラン・スヌ』

ヨソディプロ 1 世と 2 世がジャワ文学の作品を創作するにあたり同時代の朋友とし

ていたのが、『ウラン・レ』(Wulang-rèh)の作者として知られるスリ・パドゥカ・パク・ブワナ 4 世(Sěri Paduka Paku Buwana IV)である。

『ウラン・レ』は、かつてスラカルタのジャワ人によく知られており、その教えに従う者も多く、王宮で奉仕する際の指針ともされていた。

このほかに、パク・ブワナ 4 世の教えとしては『ウラン・スヌ』(Wulang-sunu)が有名である。この作品は以下のような構成となっている。

第 1 章　ダンダングラ(dhandhanggula)16 詩節(編者の序文を含む)

第 2 章　アスマランダナ(asmarandana)20 詩節

第 3 章　シノム(sinom)15 詩節

第 4 章　パンクル(pangkur)22 詩節

第 5 章　キナンティ(kinanti)23 詩節

この教訓の書も、先の述べた『ウラン・レ』と同様にアラビア文字(ペゴン、pégon[71])で書かれており、プリアンガン(Priangan、ジャワ島西部の高原地帯)が出所である。このことから、当初は『ウラン・レ』はスンダの人々によっても読まれていたことが推測される。

キナンティの韻律の後半部分は、rinasa sajroning nala; raosé lir madu gěndis.「心の中で感じるのは、蜜や糖のような味わいである」とあり、これに続いて、Pamědharé wasitaning ati…「心からの言葉が現れる」となる。

このようなことから、『ウラン・レ』は『ウラン・スヌ』の続きであるということになるのであろうか。これについては、あとで再び取り上げることにする。

これらの作品のほかにも、パク・ブワナ 4 世が説いた教えを記したものがある。それは、68 詩節からなる一部しか残されていない。序文は Dhandhanggula kang pinurwèng gěndhing「(ガムランの)曲にあわせて創られたダンダングラ(の詩)」で始まる。この字句は、上述の『ウラン・スヌ』の序文の字句 Wulang-sunu kang kinarja gěndhing「(ガムランの)曲にあわせて創られた『ウラン・スヌ』」という部分とほぼ同じである。

『ウラン・スヌ』とパク・ブワナ 4 世のもう一つの教訓の書は、私が知る限りスラカルタにはほとんど存在しておらず、私自身、今までに出会ったことがない。よく目にするのは『ウラン・レ』のみである。

75 *キアイ・シンドゥサストラ（Kiai Sindusastra）[72]

—『アルジュナ・サスラバウ』、『パルタヤドゥニャ』、『スリカンディ・マグル・マナ』、『スンバドラ・ラルン』、『チェケル・ワネン・パティ』

ヨソディプロ 1 世と 2 世と同時代にジャワ語文学で活躍した人物として、キアイ・シンドゥサストラ（Kiai Sindusastra）も有名である。彼は、のちのシヌフン・パク・ブワナ 7 世（Sinuhun Paku Buwana VII）となるプルバヤ（Purbaya）王子の秘書であった。

シンドゥサストラの著名な作品は、スグリワ（Sugriwa）とスバリ（Subali）の系譜と物語を含む『アルジュナ・サスラバウ』（Arjunasasrabau）である。この作品は、すでに第 6 章第 60 項で解説した作品『カンダ』（Kanda）に取材し、改編や付け足しが加えられたものである。

シンドゥサストラ版『アルジュナ・サスラ』（Arjunasasra）は、パルメール・ファン・デン・ブルック（Palmer van den Broek）によって VBG 第 34 巻（1870）にジャワ文字で掲載された。1872 年には 2 巻本でスマランのファン・ドルプ社から出版された。ファン・ドルプ社からは 1883 年に第 1 巻、1886 年に第 2 巻が出版されている。また Indisch Magazijn の第 1 巻で D. L. ムニールによってオランダ語への翻訳がなされている。

また、『パルタヤドゥニャ』（Partayadnya）（第 3 章第 32 項で解説した『パールタヤジュナ』（Pārthayajña）とは別の作品）もシンドゥサストラによる著作である。この作品はワヤンの演目『パルタ・クラマ[73]』（Parta-krama）を散文形式に改編したものであり、『アルジュナ・サスラ』同様、「歴史」を語る部分から始まる。物語の続きは、『スリカンディ・マグル・マナ』（Srikandi maguru-manah、弓術を学ぶスリカンディ）[74]や『スンバドラ・ラルン』（Sĕmbadra larung、棺の中のスンバドラ）[75]や『チェケル・ワネン・パティ』（Cèkèl Wanèng-pati）[76]で語られることになる。これらは全て、のちにパク・ブワナ 7 世となるプルバヤ王子の指示を受けたシンドゥサストラによって書かれた作品である。

76 *カンジュン・パンゲラン・アルヤ・クスマディラガ（Kanjĕng Pangéran Arya Kusumadilaga）[77]

—『ジャガル・ビラワ』、『リンガ・プラ』、『スマル・ジャントゥル』、『サストラ・ミルダ』

カンジュン・パンゲラン・アルヤ・クスマディラガ（Kanjĕng Pangéran Arya Kusumadilaga）とはスラカルタのグスティ・パンゲラン・アディパティ・マンクブミ 1 世（Gusti Pangéran Adipati Mangkubumi I）（同じくマンクブミと呼ばれたジョグジャカルタの初代スルタンとは別人）の息子である。この人物は文学のみならず、ワヤンにも造詣が深かった。そのためか、作品はワヤンの演目である『ジャガル・ビラワ』（Jagal Bilawa）、『リンガ・プラ』（Lingga-pura）、『スマル・ジャントゥル』（Sĕmar Jantur）、『カルタウィヨガ・マリン』（Kartawiyoga Maling）などの他、ダラン（dhalang）[78]の教本である『サストラ・ミルダ』（Sastra-miruda）も著した。

シンドゥサストラとクスマディラガは、新しく創作を行ったのではなく翻案を行っただけであると言ってよい。彼らの作品は『カンダ』に取材したものだからである。

77 *カンジュン・グスティ・パンゲラン・アディパティ・アノム（のちのパク・ブワナ 5 世）（Kanjĕng Gusti Pangéran Adipati Anom, Sĕri Paduka Paku Buwana V）[79]

―『チュンティニ』

パク・ブワナ 5 世は、まだ皇太子であった頃から文学への造詣が深かった。ヨソディプロ 2 世の作品が、ほぼ全てこの王の指示により創作されたということが、何よりの証拠である。この他にも、王によって主導された作品として『チュンティニ』（Cĕnthini）がある。

『チュンティニ』には多種多様な事柄が収められている。たとえば、イスラーム、諸々の学問、ガムラン音楽、舞踊、吉日と凶日、詩歌の吟唱、ジャワの料理、冗談、色事、各地の描写などが扱われている。これらの事柄を語る語り口もきわめて上手である。冗談に関する項目は大層おかしいし、色事に関する事柄もくまなく語られている。精神世界に関することも余すところがない。一言で言って、『チュンティニ』はジャワ文学の諸作品の中でももっとも驚嘆すべき作品である。

『チュンティニ』は複数の作者によって書かれたというのが定説である。宗教についての部分はキアイ・プンフル・タフシル・アノム（Kiai Pĕnghulu Tafsir Anom）[80]、ガムラン音楽に関する部分は宮廷のガムラン楽師[81]、色事に関する部分は王自身の監修のもとで書かれたのである。

このほかの執筆者には、ヨソディプロ 2 世（Yasadipura II）とキアイ・ランガ・トラスナ（Kiai Rannga Trasna）がいる。ラウ山やキドゥル山の頂上の状況など、各地の描写について、王は、現地に人を派遣し、地域の様子を明らかにして記録させるという手法をとった。

『チュンティニ』はもともとパシシル地方で創られた『ジャティスワラ』（Jatiswara）に由来している。

この『ジャティスワラ』を書き直し、長く引き延ばしたものが『チュンティニ』である。『チュンティニ』はバタビア学芸協会（Bataviaasch Genootschap van Kunsten en Wetenschappen）の刊行物として 8 分冊で出版され、さらに 4 巻本として出版さているが、まだ完全な内容ではない。

欠損している部分を印刷すれば本 1 冊分はある。

78 *ラデン・ガベヒ・ロンゴワルシト（Radèn Ngabèhi Ranggawarsita）(82)

ラデン・ガベヒ・ロンゴワルシト（Radèn Ngabèhi Ranggawarsita）は、ヨソディプロ 2 世（Yasadipura II）の孫にあたる人物である。したがって、生粋のプジャンガ（pujangga、宮廷詩人）の家柄の出である。彼の生い立ちや生涯の出来事については、他の書物で語られているので、ここでは説明することはしない。以下では、私自身がよく知っている作品について解説することとする。

79 パラマヨガ（Paramayoga）(83)

この作品は以下のような書き出しから始まる(84)。

> Sĕrat Paramayoga punika nyariyosakĕn lĕlampahanipun Kanjĕng Nabi Adam kaliyan lĕlampahan sarta tĕrah-tumĕrahipun para déwa, ing salajĕngipun ngantos dumugi cariyos wiwitanipun tanah Jawi dipundunungi manusa.
>
> Mĕnggah wĕwatonipun mĕndhĕt saking cariyos ingkang kocap ing sĕrat Jitapsara, anggitanipun Bagawan Palasara ing Ngastina saking anggènipun nukil suraosipun Pustaka Darya, babon saking tanah Indhu lajĕng katĕpangakĕn kaliyan suraosipun kitab Niladunirèn, babon saking Najran, sarta kitab Sitatul, babon saking Sélan ...
> （中略）Ananging suraosipun kitab-kitab wau amung kapĕthikan ingkang wontĕn

cariyosipun tumrap ing sĕrat-sĕrat Paramayoga kémawon, saha mawi anukil sakathahing hikayat, utawi riwayat, lajĕng katurutakên kaliyan étanging taun srĕngéngé sarta taun rĕmbulan. Urutipun cariyos kados ing ngandhap punika.

訳：

『パラマヨガ』は、預言者アダムの事績および神々の事績と系譜のから始まり、ジャワの地に人間が住むようになった始まりを物語る。

この物語の基本は、ハスティナ（Hastina）の尊者パラサラ（Palasara）が著した『ジタプサラ』(Jitapsara）の中の物語から取材したものである。『ジタプサラ』の出典は、インド（Indhu）からの『プスタカ・ダルヤ』(Pustaka Darya)、ナジュラン（Najran）からの『ニラドゥニレン』(Niladunirèn)、そしてセラン（Sélan）からの『シタトゥル』(Sitatul）の書である[(85)]。…（中略)。しかしながら、これらの書物から引用したエピソードは、あくまでも『パラマヨガ』で取り上げるものに限っている。さらに、ここで取り上げた物語は、太陽暦（tahun srĕngéngé）と太陰暦（tahun rĕmbulan）の紀年を付けて配列している。物語の配列は以下の通りである。

しかし、ハスティナ国の尊者パラサラの著作であるという『ジタプサラ』という書物は、作者の知る限り実在しない。『ジタプサラ』という書物はたしかに存在するが、それは、ロンゴワルシト自身の作品である（この作品については次の第 80 項で解説する)。

同様に、インドに由来する『プスタカ・ダルヤ』という題名の作品も、筆者の知る限りでは実在しない。その他のアラビア語の題名をもつ作品については、アラビア語文献の知識に乏しい筆者としては解説し得ない。『パラマヨガ』で言及されるアラビア語の諸作品が本当に実在するか否かの判断は、読者諸君に一任する。ただ、はっきりと言えることは、『パラマヨガ』の原典は、すでに第 6 章第 60 項で解説した『カンダ』(Kanda）だということである。この『カンダ』が、ロンゴワルシトによって、散文形式に改編され、修正や変更や追加がなされたのである。追加された部分の多くは、オランダ人の友人であったウィンテルやコーヘン・ストゥアートの話から聞き出したものである。例えば、カスピ海、コーカサス山脈などの地名がある。

また、ロンゴワルシトによる追加と言えることとして、「アダム」（Adam）の名をインド由来のサンスクリット風の名前である「アト・ハマ」(At-Hama）としたことが挙げ

られる。私の知る限り、インドの神々の名前のなかに「アト・ハマ」という名前は存在しない。なお、atma という語はインド哲学でしばしば用いられており、「生命」、「魂」、「生霊」という意味を持つ(86)。

太陽暦と太陰暦に関する説明もまた、ロンゴワルシトによって付け加えられた部分である。スルタン・アグン治世下のシャカ暦 1555 年（西暦 1633 年）以前のジャワで使われていた暦は太陽暦（サカ暦）であった。これは、現在もバリで使われているものである。

『パラマヨガ』の結末部は以下のとおりである(87)。

> Kacariyos sarĕng dumuginipun taun Indhu saking jaman Pancamakala angka 768 taun Adam, angka 5154 ing taun srĕngéngé utawi 5306 ing taun rĕmbulan, panjĕnĕnganipun Prabu Isaka, ratu ing nagari Surati tanah Indhustan, inggih punika ingkang sinĕbut nama Aji Saka, nagarinipun kabĕdhah ing mĕngsah. Sang prabu lajĕng jĕngkar saking praja ngungsi ing wana, dumuginipun ing wana dipunpanggihi déning kang rama Bathara Anggajali, sang prabu dhinawuhan amaratapa dhatĕng pulo ingkang suwung, prĕnah kidul-wétanipun tanah Indhu, sang prabu lajĕng mangkat dhatĕng pulo suwĕng, inggih punika pulo Jawi. Sarawuhipun ing pulo Jawi sang prabu lajĕng asĕsilih nama Ĕmpu Sangkala.
>
> Dumugi samantĕn tĕlasing cariyos ingkang kawrat ing sĕrat Paramayoga, punika lajĕng nyandhak cariyos ingkang kocap ing sĕrat Pustakaraja Purwa, tamat.

訳：

> さて、インド暦ではパンチャマ・カラ時代の 768 年、アダム暦(88)の太陽暦では 5154 年、同じく太陰暦では 5306 年に、インドゥスタン（Indhustan）にあるスラティ（Surati）国のイサカ王（Isaka）、またの名をアジ・サカ（Aji Saka）とも呼ばれる王の国が、敵の攻撃を受けた。王は、国を後にして逃げだし、森へ避難した。森へ入ると、父親であるアンガジャリ（Anggajali）神に出会った。（アンガジャリ神は）王に対して、インドの地の南東にある未だ人の住まない島で修業をするよう命じた。王はこの無人の島、すなわちジャワ島へと出立した。ジャワ島に到達するとこの王はウムプ・サンカラ（Ĕmpu Sangkala）を名乗った。

この結末までが『パラマヨガ』に記されている物語である。この物語に続くのが『プスタカ・ラジャ・プルワ』(Pustakaraja Purwa) で語られている物語である。完。

ここで、私の意見を繰り返して述べておくと、『パラマヨガ』というのは、基本的には、『カンダ』を、ロンゴワルシトが、散文形式に改編し、自身が聞きかじったことや好き勝手に基づいて追加したり変更したりしたものだということである。

なお、この作品は 1922 年にジャワ文字で出版されている。

80 ジタプサラ (Jitapsara) (89)

すでに前項で解説したように、『ジタプサラ』もまたロンゴワルシトの作品である。物語の内容も、『パラマヨガ』の中で語られているものと大差ない。ただ、『ジタプサラ』の文体の方がより美しいものとなっている。古ジャワ語の単語を多用することで、美しさを醸し出しているのである。

しかしながら、ロンゴワルシトは古ジャワ語に長けていたわけではなかったので、古ジャワ語の使用はまったく恣意的である。そのため、使われた古ジャワ語を理解することも大変に困難になっており、古ジャワ語を用いた作者の意図も理解できない。この点が明らかになる例を以下にあげる。

Pustaka Jitapsara

//o//i mandra //o// Om u siddha ring sadyana, tar sèng wardaya'stungkara, ngang ring hyang Jagad matri traya, dyama amuda di pradana, ngang sinunging dani-wasmaya, mahya kridhaning rat raya, ngang tryodhara rana wisaya, wiwisunda sandhaning dwisthi, nang adyan pudyaning asudra, kang andon mandanèng ciptamaya, lumayènging parasdya kang natani èsthining tyas kung, anglahirakĕn ungkara, om hyangkun mèh hĕmmah maya, cipta nindyastananing sang kawiswara, puhara radi arja ing Surakarta, kang murud matĕpĕt lokaya, déra mĕdhar kamudhahaning suksmaya jati, ingkang amratélakakĕn sangkĕping pratyaksana kulah kasumpurnan sajatining gĕsang, supana mambuka pranawa nalaning sampali, kang tarwilun kalulun amirasa, karaos ing dalĕm raswita wiwitaning pinudya dahat kĕlingga murda.

Wangsul mĕnggah sangkĕping pratyaksana kang kasĕbut ing dalĕm pustaka Mahadéwa wau, mangkya winĕdhar. …

上の文章の趣旨を要約すると、スラカルタ王国に僥倖をもたらすと期待されるあらゆる事柄を描かんとする筆者の無能と欠点についてのお詫びの表明、ということであろう[(90)]。

このような文章が『ジタプサラ』に見られるものである。文章には散文形式のものだけではなく、韻律形式をとったものもある。韻律形式は、しばしば散文形式の中に混在している。以下がその例である[(91)]。

1. Yadin kadyatmikan kang jinarwi, jroning Jitapsara hyang At-Hama, sigra murwèng ing monĕngé, mangèsthi kung umagut, masadrasa'smara kinarti, ri tata tri asmara, rèh kang pinarsèstu, tar lyan mung asmara cipta, lan asmara turida sangkĕp ping katri, trusthi asmara gama.
2. Yéka smaraning kakang sĕjati, tibrastha, randha amisik garwa, sagati ring jro jinĕmé, mong kung apulang lutut, kélut ing nis wahyaning rĕsmi, mĕhĕng asmara cipta, kang kèsthi kalulun, lalu nimpuna sotama, tarpantara rahsana mimba sinandi, jroning cupu kumala.

訳：

1. さて、『ジタプサラ』の中で語られる繊細なことについてである。ヒャン・アト・ハマ（アダムの別名）は、ただちに考え始め、思念をアスマラ（愛）に集中し、アスマラをトリ・アスマラ（三つの愛）とした。それは、他ならぬアスマラ・チプタ（創造の愛）とアスマラ・トゥリダ（渇望の愛）、それに第 3 のアスマラ・アガマ（信仰の愛）を加えて完全なものとなった。
2. これすなわち、まことの兄からの愛、寡婦の夫へのささやき、寝室への入室、新郎新婦の振る舞い、甘美なことへの誘惑、これらから愛が生まれる。ただアスマラ・チプタのみが求められる。そして、心の想いを集中すると、ほどなくして、あたかも感情は宝石箱の中に消えてしまった。

このように語りは続く。上記の引用は預言者シス（Sis）[(92)]の誕生について記述したものである。大まかな意味はつかむことができるが、一語一語検証して、意味を理解する

ことは筆者にはできない。

すでに先に述べたように、『ジタプサラ』で語られる物語は、『パラマヨガ』で語られる物語と同様のものである。いずれもロンゴワルシトの作品であるが、その大部分は『カンダ』から引用したものであり、一部はロンゴワルシト自身が創作したものである。

続いて『ジタプサラ』の結末部分を引用する。

> Nahan ta ing nalika punika hyang Tunggal jata nangsaya tunggal pranayaning driya, kadya pradiptaning pratanggapati ing mangsa sakri, kawismaya sotaning tyas suměka dènira manujarwi, lajuning rèh lahiring cariyos, kang mawèh saryastura, turuting taliti saking nabi Adam, wiyosipun inggih punika hyang At-hama, kalyan ibu Kawa tinědahakěn wijanging turasipun satunggal-satunggal anggènipun sammangun nastapa, brata brangta amamudya dalah salělampahanipun, mbotěn wontěn ingkang kalangkungan, urutipun kang sami kasěbut ing dalěm wirayat prapta mandhirining hyang Jagat Matritraya, mangka sasandhaning amursita trusthining kata amusthi raras mayaning dyatmika, dènira mangan-dikakakěn kados ing ngandhap punika.

訳：

> ヒャン・トゥンガルが心の賢明さと一つになったとき、その様子はまるでサクリの時代の太陽の光のようであり、物語の筋が明らかにされていく。預言者アダムの話から始まるが、これは、ヒャン・アト・ハマ（アダム）と母カワ（イヴ）の登場であり、そこから明瞭に子孫の系譜が、一人一人に関しての逸話を一つも余すことなく、順番に、ヒャン・ジャガット・マトリトラヤの即位に至るまで、明らかにされている。語りの言葉は心地よく、調和が取れており、節度がある。物語は以下のとおりである。（実際には、作品の続きは存在しない。）

なお、『ジタプサラ』（Jitapsara）という題名は jitaksara [93]という単語に由来し、「文の道に勝利した者」、すなわち「碩学」を意味する。オランダ語の geleerde in de taal en literatuur「言語と文学の碩学」にあたる。

81 プスタカ・ラジャ（Pustakaraja）(94)

『プスタカ・ラジャ』についての筆者の説明は、先に述べた『パラマヨガ』での説明と大なり小なり同じである。

『プスタカ・ラジャ』というのは、基本的に、もろもろのワヤンの演目から構成されており、ロンゴワルシトが友人から聞き取った物語や、その当時存在した童話の類に基づいている。そのすべてが、ロンゴワルシトによって変更されたり補足されたりしている。

しかし、その内容がどうであれ、一言で言って、『プスタカ・ラジャ』の大部分はロンゴワルシトによる荒唐無稽な妄言である(95)。『プスタカ・ラジャ』で言及されている諸文献『マハパルワ』(Mahaparwa)、『プルワパダ』(Purwapada)、『サバロカ』(Sabaloka)、『マハルシ』(Maharĕsi) などは現存しておらず、いまだかつて存在したこともなかった。

例えば、『スマナンタカ』(Sumanantaka）とよばれる文献があり、ヴィシュヌ神がドゥクン（dukun、呪術師）になったときの話が含まれている。この『スマナンタカ』という名称は、「スマナサンタカ」(Sumanasantaka) という語がくずれた成れの果てである(96)。ロンゴワルシトが友人から聞きかじった名前を、その意味もまったく分からないまま自らの著作『プスタカ・ラジャ』の中に引用したのである。

『スマラダハナ』(Smaradahana）についても同様のことがあてはまる。Dahana という単語は「火」を意味するので、この文献は「樹脂塗りの館」（Bale Gala-gala）の炎上を物語る作品だとロンゴワルシトは説明している(97)。一事が万事であり、これ以上『プスタカ・ラジャ』については長々と解説する必要はないと思われる。

『プスタカ・ラジャ』は 1884 年にジョグジャカルタで H. ブニン（H. Buning）によって出版された。第 2 版は 1906 年に刊行されている。

82 チュンポレット（Cĕmporèt）(98)

この作品『チュンポレット』はスリ・パドゥカ・ススフナン・パク・ブワナ 9 世（Sĕri Paduka Susuhunan Paku Buwana IX、在位 1861 年～93 年）の命により、ロンゴワルシトが創作したものである。創作された年はサンカラで記されており、song-song-gora-candra、すなわちジャワ暦 1799 年（西暦 1870/71 年）である。

文章の構成は大変に細やかであり、プルワカンティ（purwakanthi、頭韻法）も多用さ

れている。また、文章も大変に洗練されており、かえってくどく感じるほどである。例えば、村衆や村女の言葉でさえも、弁舌さわやかな都の貴族のような言葉遣いで描かれている。一つの事柄に関する記述も長々しい。

『チュンポレット』の物語は、『タントゥ・パングララン』(Tantu Panggĕlaran、第 4 章第 37 項参照)に由来し、いつのまにか民話や民衆のことわざとして人口に膾炙していたさまざまな断片的な物語に、ロンゴワルシト自身が他の物語を付け足したものである。以下がその内容である。

ジュパラ(Jĕpara)、パグレン(Pagĕlèn)、プランバナン(Prambanan)の王国にそれぞれパヌフン(Panuhun)、サンダンガルバ(Sandhanggarba)、カルンカラ(Karungkala)という名の王がいた[99]。王の子どもたちは、それぞれの運命で国を離れる。野生の動物に変身させられた者もあれば、田舎の村に入った者もあり、いずれも王と王妃である父母たちを悲しませることになった。パグレンの王の息子であるラデン・ジャカ・プラマナ(Radèn Jaka Pramana)王子は、チュンカル・サリ(Cĕngkar-sari)村のチュンポレット(Cĕmporèt)老夫婦の家に身を寄せ、老夫婦の養女ララ・クムニャル(Rara Kumĕnyar)と結婚する。

実は、このララ・クムニャルはジュパラの王の娘なのであった。二人の結婚を取り持ったのは、人間の言葉がしゃべれる九官鳥であった。また、姿形を吸い込んで肖像画のように見える宝石をはめ込んだ指輪の話も語られている。こうして、様々な不思議なことに出会った末に、国を離れた王子や王女たちはみな国に戻ることになった。ここで語られている不思議な出来事は、『プスタカ・ラジャ』で語られる内容とさほど異なってはいない。

筆者の推測では、その当時のスラカルタのジャワ人たちには摩訶不思議な話を好む傾向があったればこそ、ロンゴワルシトもそのような人々の好みにうまく合わせたのであろう。

『チュンポレット』はマチャパット形式で書かれており、スラカルタのルッシェ(Rusche)氏によって 1856 年に出版されている。以下に示す作品の冒頭部はダンダングラ[100]の韻律で書かれ、文中に作者の名前が隠されている(sandi asma、以下の下線部を参照)[101]。

1. Song-song go<u>ra</u> candraning hartati,
   lwir wini<u>dyan</u> sarasèng parasdya,

ringa-ringa pangriptané,
tan darbé labdèng kawruh,
angruruhi wĕnganing budi,
kang mirong ruharèng tyas,
jaga angkara nung,
minta luwaring duhkita,
haywa kongsi kéwran lukitèng kintèki,
kang kata ginupita.

2. Pangapusing pustaka sayĕkti,
saking karsa dalĕm sri Naréndra,
kang kaping sanga mandhirèng,
Surakarta praja gung,
sumbagèng rat dibya-di-murti,
martaotama susanta,
santosa mbĕk sadu,
sadargèng galih lĕgawa,
sihing wadya gung alit samya mĕmuji,
raharjèng praja nata.

訳：

1. Song-song-gora-candra、すなわちジャワ暦 1799 年（西暦 1870/71 年）にダンダングラの韻律で創られた。意図にかなった知恵が盛り込まれるよう、筆者は慎重に筆をすすめた。必要な知識にふさわしい技量を持っていないからである。ただ、求めるのは私の心境を受け止めてくれることである。（私には）心の動揺が秘められており、慢心がないか気を張り詰め、悲しみからの解放を希求する。言葉から創られたこの作品の叙述に欠点があってはならないから。

2. 実のところ、この作品の創作は、偉大なるスラカルタ王国を治める第 9 代の王の思し召しによる。(陛下におかれては) 国土に満ち溢れる栄光は比肩するものがなく、この上なく気立てよく、穏やかで、心は堅固にして有徳

で、寛大な心の持ち主であり、家来たちから慕われ、民は貴賤を問わず陛下を崇敬していた。ゆえに陛下の国土には繁栄がもたらされていた。

83 ババッド・プラユット（Babad Prayut）(102)

この作品は『ババッド・ギヤンティ』の続編であり、『ババッド・ギヤンティ』と同様にヨソディプロによる作品である。「プラユット」という名は、「ギヤンティの戦いの後に起こった出来事を記したもの」という意味を基に付けられたようである。K. P. H. マンクナガラ（Mangkunagara）の后ラトゥ・バンダラ（Ratu Bandara）はジョグジャカルタのスルタンの王女であったが、父親のスルタンから夫との離婚を命じられる。ジャグジャカルタとスラカルタの二王国の間で所領の境界をめぐって衝突が続くが、オランダの高官や政府が間に入って和解が成立し、静まった。

作品には、引き続いて、衝突がおさまったあとにも続く反乱者たちとの戦いが語られる。例えば、P. H. プラブジャカ（Prabujaka）、パヌンバハン・コワック（Panĕmbahan Kowak）、R. ウィラットムジャ（R. Wiratmĕja）の反乱などである。この作品には、親族関係に関わることに限られるが、スラカルタ王国とジョグジャカルタ王国の関係についても描かれている。

韻律の調子も文章の構成も大変整っており、感情も豊かに描かれている。さまざまな描写も明瞭であるし、それとない目配せや当てこすりを描くにあたって、その意図を的確に表現している。

84 ババッド・パクプン（Babad Pakĕpung）(103)

ババッド・パクプン（Babad Pakĕpung）は、ススフナン・パク・ブワナ 4 世（Susuhunan Paku Buwana IV）の治世下（1788～1820 年）に創られた作品である。文学作品の中では小品の部類である。内容は、ススフナン・パク・ブワナ 4 世が、超自然的な力（sakti）を持つとされる、バフマン（Bahman）、ウィラディグダ（Wiradigda）、パヌンガ（Panĕngah）、カンドゥルハン（Kanduruhan）の 4 人を召し抱えていたときの話である。このことが、やがて、オランダ政府とジョグジャカルタ王国の中に不信感を生じさせることになった。何か一騒動起こそうとしているのではと疑われたのである。結局、スラカルタはジョグジャカルタ、オランダ政府、マンクナガラ王家の軍隊によって包囲されることになった。

この状況を打開し、包囲網が解かれる糸口となったのは、スラカルタの長老たちの助言のおかげであった。彼らは、一連の混乱を引き起こした、超自然的な力を持っているとされる 4 人を捕らえるよう進言したのである。

『ババッド・パクプン』はヨソディプロ 2 世の作品であるとされている。韻律の調子も生き生きとしており、美しく、明解である。一文一文の意味も深淵であり、簡潔で冗長なところがない。文章の中には紀年も織り込まれている。

以下は冒頭部からの引用である。

1. Kang sinawung sĕkar gula milir, duk juměněng dalĕm jĕng Susunan, nĕnggih Paku Buwana, yé kang Abdurrachman iku, Sayidina Panata Gami, Sénapati Ngalaga, ingkang kaping catur, kang ngadhaton Surakarta, dèrèng lama dènya juměněng narpati, wantu nata taruna.

2. Ingadhĕpan abdi kang tan yukti, nama Paněngah lan Wiradigda, Bahman kĕlawan Nursalèh, samya ngadoni atur, pinrih bĕnggang lawan Kumpĕni, aturnya mring sang nata, wong papat puniku, akathah sasanggupira, atĕmahan kawĕdhar tyasnja sang aji, kényut mring sétan papat.

3. Sahaturé dhinahar mring aji, nata supé mring pamomongira, rina wĕngi ésuk soré, mung sétan papat iku, kang ginagas gagas ing galih, abdi pamomongira, awit kala timur Ngabèhi Yasadipura, wus siningkur, tan kanggĕp sahatur nèki, dadya nahĕn sungkawa.

訳：

1. 第 4 代のススフナン(104)にしてアブドゥルラフマン、サイド、イスラームの指導者、セナパティ・ガラガであるパク・ブワナが、スラカルタ王国の当主に即位して間もなくまだ若君であったときに、ダンダングラの韻律で（この作品は）編まれた。

2. 不調法者の私が目にしたのは、パヌンガ、ウィラディグダ、バフマン、ヌルサレの 4 人が王に向かって、オランダ東インド会社から離れるよう説得している姿であった。しまいにこの 4 名は王を言い含め、王の心はすっかりこの 4 人の悪魔に奪われてしまった。

3. 王はことごとく彼らの進言に従い、もはや側近のことを忘れてしまった。昼夜、朝夕、頭にあるのはこの 4 人の悪魔のことばかりである。皇太子の時からお側で仕えてきた私、ヨソディプロでさえ、話を聞き入れてもらえず、悲しみに暮れるばかりであった。

『プラユット』と『パクプン』の 2 作品は筆者の知る限り、未だ出版されていない。なお、どちらもマチャパットの形式で書かれている。

注

(1) 原書のジャワ語版は Sastra Jawa: Program Digitalisasi Sastra Daerah のサイトで電子版が提供されている。ジャワ語版の確認はこの電子版に依拠した。
サイトの URL : https://www.sastra.org/bahasa-dan-budaya/pengetahuan-bahasa/1639-kapustakan-jawi-purbacaraka-1954-172-6-jaman-islam

(2) 遷都の立地がソロ（Sala）村であったため、現在に至るまでソロの名前でも知られている。なお、スラカルタ遷都が公式に宣言されたのは 1746 年であった。

(3) 本書には取り上げられていないが、教訓詩『ウェダタマ』（Wédhatama）を著したマンクナガラ 4 世（Mangkunagara IV、在位 1853～81 年）の文芸活動も、宮廷を舞台にした古典ジャワ文学の最後の輝きとして数えられるであろう（Mangkunegara 1990）。宮廷の外に活動の場を移した近代文学としてのジャワ文学については、インドネシア独立後のジャワ文学作品を集めた Ras（1979）を参照。

(4) 本章で取り上げられる著者たちの主な称号としては、ラデン（Radèn）、ラデン・パンジ（Radèn Panji）、ラデン・トゥムングン（Radèn Tumĕnggung または Tĕmĕnggung）、ラデン・ガベヒ（Radèn Ngabèhi）がある。

(5) 現代ジャワ語の作品名には「書物」を意味する「スラット」（sĕrat 敬体。常体は「ラヤン」layang）が付くのが一般的であり、原書ジャワ語版では、本章の作品名にはすべて sĕrat が付いている（例えば、Sĕrat Cêmporèt、Sĕrat Babad Giyanti）。本稿では、「スラット・〇〇」ないしは「〇〇の書」と訳出する煩雑さを避けて一律に省略した。なお、原書インドネシア語版では、作品名に付く sĕrat を一律に kitab と訳しているが、kitab にはイスラームの宗教書の含意もあるので、ジャワ語の文学作品の書名に付けるには不適当である。

(6) ここで「翻案」と訳されている原語はジャワ語で pĕmbangun、インドネシア語で pembangunan である。いずれも基語 bangun「起きる」の派生語で、「発展、開発」という意味である。この時代のジャワでカウィ語（kawi）と呼ばれていた古ジャワ語の文学作品を現代ジャワ語に改編ないし翻案することで「発展」させた作品という意味である。とくにマチャパット（macapat、下の註を参照）の韻律に改編することを意味する。

(7) 現代ジャワ語文学の伝統韻律詩（常体でトゥンバン tĕmbang、敬体でスカル sĕkar）は、1）トゥンバン・グデ（tĕmbang gĕdhé、スカル・アグン sĕkar agĕng、「大きな詩」の意）、2）トゥンバン・トゥンガハン（tĕmbang tĕngahan、スカル・マディヤ sĕkar madya、「中間の詩」の意）、3）トゥンバン・マチャパット（tĕmbang macapat、スカル・マチャパット sĕkar macapat）の 3 グループに分かれる。いずれのグループの場合も、複数種類の韻律があり、同じ種類の韻律の詩節が複数集まって詩章を構成する。

第 1 のグループには古ジャワ語のカカウィン（kakawin）の韻律を含むこともあるが、現代ジャワ語文学の韻律としては、1 詩節は 4 行から構成され、各行の音節数が一定という特徴がある（母音の長短の区別がない点がカカウィンと異なる）。第 2 と第 3 のグループでは、韻律の種類ごとに、1 詩節を構成する行数、各行の音節数と行末音節の母音が定まっている。例えば、第 3 グループのマチャパットの代表であるダンダングラ（dhandhanggula）の場合、1 詩節は 10 行から構成されており、各行の音節数と行末音節母音は 10i、10a、8e、7u、9i、7a、6u、8a、12i、7a である。
3 つのグループのうち第 3 グループのマチャパットがもっとも一般的で種類も多い。本章では、ダンダングラのほか、シノム（sinom）、アスマラダナ（asmaradana、あるいは、アスマランダナ asmarandana）、キナンティ（kinanthi）、ミジル（mijil）が取り上げられている。第 1 と第 3 の中間とされる第 2 グループに属する韻律の種類は多くなく、また、マチャパットとの区別も曖昧である。本章で取り上げられているのは、ガンブ（gambuh）とジュル・ドゥムン（juru dĕmung）の 2 種類である。それぞれの韻律には特定の調子が結びついており、たとえば、アスマラダナは恋愛詩に用いられる。現代ジャワ語の韻律詩はガムランの伴奏で詠唱されることが多く、両者には深い関係がある。詳細は Kunst（1949）を参照。

(8) ジャルワ（jarwa）は、古ジャワ語の表現や作品を現代ジャワ語で書き表した表現や作品のこと。

(9) ウィンドゥ暦は 1 周期 8 年（太陰暦）からなるジャワ独自の暦法である。

(10) サンカラ（sangkala）は、ジャワの年数表示法（クロノグラム）。スンカラまたはスンコロ（sĕngkala）とも表記する。単語と数字が対応しており、並んだ 4 つの単語が、左から右に、年数の一の桁、十の桁、百の桁、千の桁の数値を表わす（したがって、実際には右から左に読み取ることになる）。

(11) ジュマディラワル月はヒジュラ暦の第 5 月のアラビア語名（Jumada al-Awwal、ジュマーダ・アル=アウワル）のジャワ語化した表記。なお、原書インドネシア語版ではジャワ暦 1704 年を西暦 1782 としているが、ジャワ暦 1704 年はヒジュラ暦 1192 年であり、同年第 5 月は西暦 1778 年 6 月に相当する。原書ジャワ語版は正しく西暦 1778 年になっている。

(12) シヌフン（Sinuhun、シヌウン Sinuwun とも表記）はスラカルタのススフナンおよびジョグジャカルタのスルタンに対する敬称。

(13) 「カウィ語」は詩人（kawi）によって使われた言語という意味があり、単に古い時代の言語という意味ばかりではなく、典雅な「雅語」というニュアンスが含まれている。本章では、作品中の用例を除いて、原則として、原書の「カウィ語」を「古ジャワ語」と訳している。

(14) 『アルジュナ・ウィワーハ』は『マハーバーラタ』に登場するパーンダワ（Pāṇḍawa）兄弟の三男アルジュナ（Arjuna）を主人公にした物語。詳細は本書第 2 章第 17 項を参照。

(15) パク・ブワナ 3 世版の『ウィワハ』の刊本については Uhlenbeck（1964: 138）を参照。

(16) ヨソディプロ父子の生涯および業績については不明な点が多い（Ricklefs 1997）。ヨソディプロ 1 世は 1729 年に生まれ、1803 年に死去したとされる。ヨソディプロ 2 世の生年は不明で、およそ 1790 年から 1820 年にかけて活躍し、1844 年に死去したとされる。ヨソディプロ 2 世の孫が本章第 78 項で取り上げられるロンゴワルシトである。『ラマ』の刊本については Uhlenbeck（1964: 138）を参照。『ウィワハ』については Uhlenbeck（1964: 138）および Kutara（1990）の研究を参照。Ricklefs（1997）によると、本書でヨソディプロ 1 世の作品として取り上げられているもののうち、『タジュサラティン』、『メナック』、『チュボレック』、『ウィワハ』の 4 作について、ヨソディ

プロ 1 世の作品とすることに疑問を付している。詳細は各項目の註を参照。

(17) キアイ（kiai または kyai）はジャワ語で男性に対する尊称。原書ではヨソディプロ親子に対して一貫してキアイを冠しているが、訳文では「ヨソディプロ」とのみ表記した。

(18) キドゥン（kidung）は、古ジャワ語の韻律詩カカウィン（kakawin）に対して、中期ジャワ語および現代ジャワ語の伝統的韻律詩の総称。とくに中期ジャワ語の韻律詩のジャンルを示す場合もあるが、本章では、現代ジャワ語の韻律詩であるトゥンバン・マチャパット（tĕmbang macapat）と同義で使われている。

(19) 本書でヨソディプロの翻案とされる『アルジュナ・ウィワーハ』の現代ジャワ語版は、実際にはウィンテルの作品であることが明らかになっている（Ricklefs 1997; Kuntara 1990: 3, 6, 325）。

(20) ダサムカ（Dasamuka、古ジャワ語およびサンスクリット語 Daśamukha）は、「十の顔を持つ者」の意で、ラワナ（Rahwana、古ジャワ語 Rāwaṇa、サンスクリット語 Rāvaṇa）の別名。

(21) インドのヴァールミーキ版『ラーマーヤナ』は 7 巻からなるが、このうち第 7 巻は後代の追加であり、ラーヴァナ（Rāvaṇa）の生い立ちなど本編に先立つ前日譚が語られている。古ジャワ語『ラーマーヤナ』にはラーマ（Rāma）の勝利と帰還を描く第 6 巻までに相当する内容しか含まれていない。第 7 巻にあたる内容は古ジャワ語の散文作品『ウッタラ・カーンダ』（Uttara Kāṇḍa、本書第 1 章第 6 項）およびカカウィン作品『アルジュナ・ウィジャヤ』（Arjunawijaya、本書第 3 章第 30 項）で描かれている。『アルジュナ・ウィジャヤ』に登場するアルジュナは『マハーバーラタ』のアルジュナとは別人で、「千本の腕を持つアルジュナ」を意味するアルジュナ・サハスラバーフ（Arjuna Sahasrabāhu）である。現代ジャワ語の作品では、アルジュナ・サスラバウ（Arjunasasrabau）あるいはアルジュナ・サスラ（Arjunasasra）、もしくはそれぞれの「アルジュナ」を省略した題名で知られる。現代ジャワ語の『ラマ』物語では、冒頭でアルジュナ・サスラバウとラワナが対決する前日譚を描いたあと、ラマを主人公にした本編を語る構成になっている。

(22) 第 2 詩節から第 7 詩節までなら「5 詩節」ではなく 6 詩節と思われるが、原文のままとした。

(23) 原書ジャワ語版では「第 14 詩節の途中まで」であるが、インドネシア語版原文のままとした。

(24) 原書ジャワ語版では「第 19a 詩章」であるが、インドネシア語版原文のままとした。

(25) カンジュン（Kangjĕng）は最高位の王族の称号、パンゲラン（Pangéran）は君主の息子の称号「王子」。原書ジャワ語版では「シンガサリ（Singasari）」であるが、インドネシア語版原文のまま「バリタル（Balitar）」とした。

(26) スカル・アグンについては、上述の韻律詩についての註を参照。

(27) Ms. B. G.番号は、旧バタビア学芸協会（Bataviaasch Genootschap van Kunsten en Wetenschappen）所蔵の写本番号。現在はインドネシア国立図書館に所蔵。

(28) 原題は Bratayuda である。刊本については Uhlenbeck（1964: 138–139）を参照。

(29) 原書のジャワ語版では bambang となっている。これはワヤン（wayang）に登場する武人のことであるが、都の雅な武人ではなく、山出しの武骨者というニュアンスがあるため、インドネシア語版では「山のクシャトリア」（ksatria gunung）と表記されている。ワヤンについては松本（2009）を参照。

(30) 原題は Panitisastra である。刊本については Uhlenbeck（1964: 123）を参照。また、インドネシア教育文化省の刊本（Endang Tri Winarni 1990）および Sudewa（1991）による研究がある。

(31) カウィ・ミリン（Kawi-miring）とは、18 世紀後半のスラカルタ宮廷に登場した様式

である。「ミリン」とはジャワ語で「傾いた」という意味であり、カウィ語（古ジャワ語）の傾向を示した現代ジャワ語による韻律作品を指し示す。カウィ・ミリンに分類されている作品としては、『アルジュナ・サスラバウ』、『ブラタユダ』、『ラマ』、『ビマ・スチ』（別名デワ・ルチ）、『パニティ・サストラ』などがある。カウィ・ミリンについては McDonald（1983, 1986）を参照。

(32) 原書では「カウィ・ジャルワ」（Kawi-Jarwa）と記載されているが、意図は不明である。文脈から判断して「ジャルワ」と訳した。

(33) ダンダングラ以下の名称はすべてマチャパット韻律の種類である。なお、第 3 詩章ガンブの詩節数がインドネシア語版では 10 詩節であるのに対して、ジャワ語版では 13 詩節になっている。したがって、全体の詩節数も、インドネシア語版に従えば 150 詩節、ジャワ語版に従えば 153 詩節になる。

(34) 《原註》近年、新しいジャカルタ博物館では、きわめて多くの詩章からなる『ニティサストラ』の写本を購入した。おそらくこれがムニール博士によって解説された写本と思われる。《訳註》原註の「博物館」とは、現在のジャカルタ国立博物館を指す。同博物館の歴史はオランダ植民地時代の 1778 年に設立されたバタビア学芸協会（Bataviaasch Genootschap van Kunsten en Wetenschappen）に遡る。本書でも引用されている VBG は同協会の刊行物である。協会所属の博物館と所蔵品は 1962 年に正式にインドネシア政府に移譲された。また、協会附属図書館の蔵書は 1980 年代に国立図書館に移管された。

(35) 『ニティスルティ』は本書の第 6 章第 53 項で取り上げられている作品。サンカラによると遅くとも 1612 年に成立しており、ダンダングラの韻律による古ジャワ語で書かれている（Florida 1993: 177, KS 336.6）。

(36) 原題は Sĕrat Arjunasasra、別名 Lokapala である。原書インドネシア語版では Arjuna-sasra と表記するが、ジャワ語版にしたがって Arjunasasra とした。刊本については Uhlenbeck（1964: 138）を参照。

(37) マニスは、1 週 5 日からなるジャワの五曜の第 1 日。

(38) 原書の該当部分は Sahasraboja であるが、boja「食べ物」では意味が通らない。buja「腕」の誤記とみなせば、Sahasrabau すなわち Sasrabau の別表記として理解できる。

(39) 文中の astha gathitanya nuju の部分は理解できないため訳出しなかった。日付は、ジャワ暦 1746 年に対応するヒジュラ暦 1234 年の第 5 月の 14 日、木曜日は西暦 1819 年 3 月 11 日木曜日にあたる。

(40) カンジュン・グスティ（Kangjĕng Gusti）は王子に対する敬称。パンゲラン・アディパティ・アノム（Pangéran Adipati Anom）は皇太子の称号。

(41) スグリワ（Sugriwa）とスバリ（Subali）は『ラーマーヤナ』においてラーマを助ける猿の王スグリーヴァ（Sugrīva）とその兄ヴァーリー（Vālī）のジャワ語の名前である。

(42) ウィスラワ（Wisrawa、サンスクリット語 Viśravas）の息子が『ラーマーヤナ』に登場するラワナ（Rahwana、サンスクリット語 Rāvaṇa）である。ダナラジャ（Danaraja、サンスクリット語 Vaiśravaṇa、別名 Kubera）もウィスラワの息子で、ラワナとは異母兄弟にあたる。

(43) 原題は Sĕrat Darmasunya である。本書の詳細は不明である。Florida（1993: 318）には Darmasonya の記載はあるが、本書とは異なる作品である。

(44) イルム・クバティナン（ilmu kĕbatinan）は、ジャワの土着信仰に、ヒンドゥー教、仏教、イスラーム神秘主義の教えが混じったジャワの神秘主義思想。「ジャワ（神秘）主義」を意味するクジャウェン（kĕjawèn）とも呼ばれる。

(45) ダンダングラの韻律である。

(46) ジャワ暦 1742 年に対応するヒジュラ暦 1230 年の第 9 月の 9 日、火曜日は西暦 1815 年 8 月 15 日火曜日に対応する。

(47) 原文にも誤植が残っていたので、本来の意図にしたがって修正した。
(48) 原題は Sĕrat Déwaruci Jarwa である。原書インドネシア語版では Déwa-ruci と表記するが、ジャワ語版にしたがって Déwaruci とした。『マハーバーラタ』から題材をとって作られたジャワ独自の作品である。内容については本書第 5 章第 42 項を参照。刊本については Uhlenbeck（1964: 139）を参照。また、インドネシア教育文化省の刊本（Haryana Harjawiyana 1985）がある。最近の研究としてワヤンに基づいた Arps（2016）がある。
(49) 原文のインドネシア語では「火-2-王-僧」となっているが、ジャワ語の出典にしたがって「火-2-僧-王」に訂正した。
(50) 原文の minggah（または inggah）とはガムランの曲調が変化し、盛り上がる部分。歌詞もそれに合わせて変化する。
(51) 一般にジャワ文学史では、現代ジャワ語の作品のなかで、スカル・アグン韻律で書かれた作品は古く、マチャパット韻律で書かれた作品は新しいとされているので、ここでは例外的な事例として指摘されている。
(52) ウムプ（ĕmpu、またはムプ mpu とも）は、霊力を持つとみなされる尊者などに付ける敬称。アジ（aji）は「王」の意。アジ・サカは、サカ暦のサカを擬人化した存在と推測される。
(53) 原題は Sĕrat Ménak である。預言者ムハンマドの叔父アミル・ハムザを主人公としたペルシア語の物語をもとに 15 世紀にマレー語の作品『ヒカヤット・アミル・ハムザ』（Hikayat Amir Hamzah）が作られた（Winstedt 1969: 95–97）。それをもとに 1715 年にジャワ語に翻訳したものがカルタスラ版の『メナック』である（第 6 章第 56 項）。これがさらにヨソディプロによって改編されたものが本作品である。刊本については Uhlenbeck（1964: 140）を参照。Ricklefs（1997）はヨソディプロ 1 世の関与に疑義を示すものの、決定的な根拠は示していない。『メナック』物語はワヤン・ゴレ（wayang golèk、木偶人形芝居）の題材として西ジャワでとくに人気を博した。
(54) 原書では、ジャヤスブラタは「en-co sun の名でも知られる」とされる。なお、Uhlenbeck（1964: 168）によればジャヤスブラタの称号は Radèn Ngabèhi ではなく Radèn Panji である。
(55) 原題は Sĕrat Ambiya Yasadipuran（ヨソディプロ版アンビヤの書）である。クルアーンに言及されるアダムを初めとする過去の預言者たちにまつわる伝説を集成した物語である（第 6 章第 59 項の訳註も参照）。ジャワ語の Ambiya（マレー語の Anbia）はアラビア語で「預言者」を意味する nabi の複数形 anbiyā’に由来する。したがって、原書の表記は Ambiya であるが、アラビア語表記に近い Anbiya とも表記される（『メナック』の登場人物であるアンビヤ Ambyah と混同しないこと）。ジャワではタプル・アダム（Tapĕl Adam）の別名でも知られている。本作品はジャワ暦 1731 年（西暦 1804/05 年）の成立なので、前年に死去したヨソディプロ 1 世が本作の作成に関わったとは考えにくい（Ricklefs 1997）。
(56) 原題は Sĕrat Tajusalatin である。「王たちの冠」を意味するペルシア語題名 Tāj as-Salāṭin のジャワ語表記である。1603 年頃にアチェでペルシア語の典拠からマレー語に翻訳された作品をさらにジャワ語に翻訳したものである（Winstedt 1969: 137–141）。刊本については Uhlenbeck（1964: 139–140）を参照。Ricklefs（1997）によると、プルボチャロコが言及する写本に記載された紀年には本文のヒジュラ暦 1247 年（西暦 1831/32 年）と末尾のジャワ暦 1798（西暦 1869/70 年）とジャワ暦 1801 年（西暦 1872/73 年）の 3 つがあり、最初の紀年は作品が書かれた年、末尾の 2 つの紀年は写本が作られた年と考えられる。したがって、本作品がヨソディプロ 1 世によって書かれた可能性はないとする。
(57) 原書では「ヒジュラ暦 1139 年、ジャワ暦 1726 年」とあるが、ヒジュラ暦 1139 年は

西暦 1726/27 年、ジャワ暦 1726 年は西暦 1799/1800 年に対応し、両者は一致しない。上の註で指摘したように、プルボチャロコの紀年の記載にはそもそも誤りがあるが、訳文ではそのままにした。

(58) 原題は Sĕrat Cĕbolèk である。『チャボレック』(Cabolèk) とも表記する。Soebardi (1975) の校訂テキストと英訳がある。この作品中で取り上げられる事件が起きたのは 1731 年とされており、Ricklefs（1997）は当時 2 歳であったヨソディプロ 1 世が本作の原作者であることはあり得ないと断じている。19 世紀ジャワ社会における非正統的イスラームを批判する言説としての本書の意義については菅原（2013）を参照。

(59) メッカ巡礼を済ませた者に対する敬称。

(60) 原題は Sĕrat Babad Giyanti である。インドネシア語版では Gyanti と表記されているが、ジャワ版に従って訂正した。題名のギヤンティは、1755 年にマンクブミ王子にスルタン称号をもつ独立した王家の地位を認める条約が結ばれたギヤンティ村にちなむ。この作品はヨソディプロ 1 世の創作が疑われていない数少ない作品の一つである。刊本については Uhlenbeck（1964: 129）を参照。バライ・プスタカ版については深見（2019: 187, 199-200）に言及がある。

(61) ババッド（babad）はジャワ語による史伝書のジャンルを指す総称。本書では主として文学的観点から作品が選ばれているが、韻文、散文をあわせて多数のテキストが存在する。もっとも有名な『ババッド・タナ・ジャウィ』（Babad Tanah Jawi）については Uhlenbeck（1964: 129）および深見（2012a, 2012b, 2012c, 2013, 2014a, 2014b, 2015a, 2015b, 2016a, 2016b, 2019）を参照。

(62) ジョグジャカルタ（Yogyakarta）のこと。現在は、ジョグジャカルタ特別州およびその州都の名称である。

(63) 原題は Sĕrat Sasanasunu である。原書インドネシア語版では Sasana-sunu と表記するが、ジャワ語版にしたがって Sasanasunu とした。写本については Florida（1993: 186, 203）を参照。

(64) 原題は Sĕrat Wicara Kĕras である。写本については Florida（1993: 203）を参照。

(65) 原書ジャワ語版にしたがって wĕreh を wĕruh に訂正。

(66) ブラウィジャヤ（Brawijaya）は、ジャワの伝承に登場するマジャパヒト王国の最後の王。

(67) サントリとは、狭義ではイスラーム寄宿塾（プサントレン、pĕsantrèn）で学ぶ学生を指すが，広義では，イスラーム的規範により忠実であろうとするイスラーム教徒の意に用いられるジャワ語である。

(68) Kulhu はクルアーンの第 112 章「純正」（Al-ikhlās）のジャワ語名。4 節の短い章でありながらイスラームの本質である神の唯一性を主題とする章である。

(69) この作品名に類似した作品として、スラカルタおよびジョグジャカルタの宮廷の事例を取り上げた教訓詩『オンデ・パティ』（Ondhé Patih）がある（Florida 1993: 137）。

(70) 『ウラン・レ』の刊本については Uhlenbeck（1964: 125）を参照。写本については Florida（1993: 185, 187, 190, 322）を参照。『ウラン・スヌ』の写本については Florida（1993: 211）を参照。

(71) アラビア文字で記されたジャワ語をペゴン（pégon）という。

(72) 原書インドネシア語版では Sindu-sastra と表記するが、ジャワ語版にしたがって Sindusastra とした。『アルジュナ・サスラバウ』の刊本については Uhlenbeck（1964: 138）を参照。その他の作品の写本については Florida（1993: 229, 237, 238）を参照。

(73) パルタ（Parta）はアルジュナ（Arjuna）の別名、クラマ（krama）は結婚の意。アルジュナとクルスナ（Krĕsna）の妹スンバドラ（Sumbadra、Sĕmbadra とも表記）の結婚を描くワヤンの演目。スンバドラは、インドのスバドラー（Subhadrā）に対応する。

(74) スリカンディ（Srikandhi）がアルジュナから弓術を学ぶエピソードを描くワヤンの

演目。スリカンディは、インドのシカンディー（Śikhaṇḍī）に対応する。

(75) スンバドラがサルヤ（Salya）王の息子ブリスラワ（Burisrawa）に言い寄られて、死を選ぶという演目である。

(76) 同題のマレー語のパンジ物語（Panji）が有名である（Winstedt 1969: 54–58）。クリパン（Kuripan）の王子イヌ・カルタパティ（Inu Kartapati）とダハ（Daha）の王女チャンドラ・キラナ（Candra Kirana）がいくたの試練を経て結ばれる。題名は主人公の王子の変名の一つである。パンジ物語については本書第 5 章第 45 項『パンジ・アンレニ』の解説を参照。

(77) クスマディラガの作品の写本については Florida（1993: 138, 232）を参照。

(78) ダラン（ジャワ語で dhalang、インドネシア語で dalang）は、人形影絵芝居ワヤン・クリ（wayang kulit）における人形遣い。人形を操るのみならず、語りのすべてを行い、ガムラン奏者たちに指示を出すなど、演目の進行において全面的に主導する。ワヤンについては松本（2009）を参照。

(79) 『チュンティニ』は同時代のジャワ社会の多様な主題を扱っていることから、しばしばジャワ文化の百科事典と評される。刊本については Uhlenbeck（1964: 125）を参照。全 12 巻の刊本（Kamajaya 1986–91）がある。近年、英語抄訳が出版されている（Soewito Santoso et al. 2006）。『ジャティスワラ』については Behrend（1995）を参照。

(80) ジャワでは、プンフル（pěnghulu）はモスクの責任者であり、イスラーム法に準拠して裁判を行った。1882 年以降、オランダの統治機構の中でイスラームに基づく宗教裁判を担当した。

(81) 原書の abdi dalěm děmang niyaga kirikanan を「宮廷のガムラン楽師」と訳した。

(82) ロンゴワルシトは 1802 年に生まれ、1873 年に死去。幼名はバグス・ブルハム（Bagus Burham）。1819 年からスラカルタ宮廷に出仕し、1845 年にプジャンガに任命された。本書で紹介された作品のほかにも『ジャカ・ロダン』（Jaka Lodhang）や『カラティダ』（Kalatidha）など多数の作品を残した（Kamajaya 1964, 1985）。当時はオランダ人によるジャワ語文献の研究や活字出版も始まっており、ロンゴワルシトも現地のジャワ学者ウィンテル（C. F. Winter、1799 年～1859 年）やコーヘン・ストゥアート（A. B. Cohen Stuart、1825 年～1876 年）と交流を持って、ジャワ語辞典の編纂に協力した。ロンゴワルシトの生涯と作品については Andjar Any（1979, 1980）、ウィンテルについては深見（2019: 180-182）を参照。

(83) 原題は Sěrat Paramayoga である。本作品が典拠とした『カンダ』の「歴史観」については青山（1994）を参照。刊本として Kamajaya（1977）、インドネシア語訳からの日本語訳に豊田（2017, 2018, 2019）がある。

(84) 原書インドネシア語版にはジャワ語原文は載せられていない。

(85) 本書に登場する地名はロンゴワルシトの創作世界での地名であるが、ハスティナはマハーバーラタに登場する王都、インドはインド、ナジュランは中東の地名、セランはセイロン、すなわちスリランカを示している。

(86) ジャワ語の atma はサンスクリット語の ātman に由来し、「梵我一如」の「我」に相当する。

(87) 原書インドネシア語版にはジャワ語原文は載せられていない。

(88) アダム暦はロンゴワルシトの創作と思われる暦で、太陽暦と太陰暦の 2 通りの紀年があり、人類の祖アダムに由来する（豊田 2019: 153）。

(89) 原題は Sěrat Jitapsara である。Florida は『パラマヨガ』（1993: 160）に言及される『ジタプサラ』のほかに、著者不明の同名の写本 2 点（1993: 313–314）を記載している。

(90) 原書インドネシア語版にはジャワ語本文は訳出されていない。

(91) 韻律形式はダンダングラである。1 詩節 10 行で、各行の音節数と行末音節の母音は以下のとおりである：10i、10a、8e、7u、9i、7a、6u、8a、12i、7a。

(92) インドネシア語版では「預言者イサ」（Nabi Isa、キリスト教のイエスのこと）となっているが、ジャワ語版にしたがって「預言者シス」（Nabi Sis）に訂正した。シスは旧約聖書のセトに対応し、預言者アダムの三男である。大洪水を生き延びたヌフ（Nuh、旧約聖書のノア）はシスの子孫である。

(93) Jita はサンスクリット語に由来する古ジャワ語で「（目標を）制圧した」、aksara も同じく「文字」を意味し、両者を合わせると「文字を自分のものにした」、すなわち「言語と文学の達人」の意味になる。

(94) 原題は Sĕrat Pustakaraja である。原書インドネシア語版では Pustaka-raja とするが、ジャワ語版にしたがって Pustakaraja とした。刊本として Kamajaya（1993–97）がある（全 9 巻のうち 4 巻まで）。写本については Florida（1993: 154–164, 165–172）を参照。

(95) ジャワ語版とインドネシア語版のいずれの原文もここでは omong-kosong（根も葉もない戯言）という表現になっており、プロボチャロコによるロンゴワルシトへの強い批判が表れている。

(96) 本書の第 2 章第 19 項『スマナシャーンタカ』を参照のこと。

(97) Bale Gala-gala（Bale Sigala-gala とも言う）は、マハーバーラタに関わるワヤンの演目の一つで、パンダワ 5 兄弟がコラワ兄弟の策略で炎上する小屋に閉じ込められるエピソードである。それに対して、実際にする存在する『スマラダハナ』は、愛の神カーマがシヴァ神によって焼き尽くされる物語である。本書の第 2 章第 20 項『スマラダハナ』を参照のこと。

(98) 原題は Sĕrat Cĕmporèt である。インドネシア教育文化省の刊本（Sudibjo Z. Hadisutjipto 1980）と豊田の研究（2008）がある。写本については Florida（1993: 171）を参照。

(99) 原書では、「カルンカラ（Karungkala）、カトゥンマララス（Katungmalaras）、サンダンガルバ（Sandhanggarba）という名の王がいた」となっているが、『チュンポレット』のテキストに従って王の名を訂正した。なお、パグレンはパグラン（Pagĕlan）とも表記される。

(100) 1 行目の hartati は「砂糖」の意で、ダンダングラのグラは「砂糖」の意であることをうけて、ダンダングラの韻律が使われていることを示す。

(101) 《原註》本文中の sandi-asma は以下のとおり: ra dyan nga be hi Rong ga war si ta。《訳註》sandi は「隠された」、asma は「名前」の意。作者が自分の名前を韻文の作品の中に埋め込む技法。名前を音節に分解し、それぞれの音節を各行の中に配置する。本文の下線部をつなぎ合わせると ra dyan（radèn の異形）nga be hi Rong ga war si ta となり、「ラデン・ガベヒ・ロンゴワルシト」の名前が読み取れる。

(102) 原題は Sĕrat Babad Prayut である。Florida（1993: 81）はヨソディプロ 1 世の作とする。ジョグジャカルタのスルタン・ハムンク・ブワナ 1 世とスラカルタのマンクナガラ 1 世の関係が悪化し、マンクナガラ 1 世に嫁いでいたスルタンの娘ラトゥ・バンダラが、父親のスルタンから離婚を強いられた 1763 年の事件が語られる。写本については Florida（1993: 81）を参照。

(103) 原題は Sĕrat Babad Pakĕpung である。Florida（1993: 82）はヨソディプロ 2 世作とする。パクプンは「包囲」の意味で、スラカルタ王宮がオランダ東インド会社、ハムンク・ブワナ 1 世、マンクナガラ 1 世の連合軍によって包囲された 1790 年のパクプン事件を描く。写本については Florida（1993: 82）を参照。

(104) 以下、パク・ブワナ 4 世の称号が列挙される。「ススフナン」（原文では同意語の Susunan と表記）はスラカルタの王の称号。「アブドゥルラフマン」は「神のしもべ」の意。「サイド」は預言者ムハンマドの子孫であることを示す称号。「セナパティ・ガラガ」は「戦場における将軍」の意で、マタラム王国の初代王の名でもある。

参考文献（主に第７章に関するもの）

略語一覧

BKI　Bijdragen tot de Taal-, Land- en Volkenkunde van het KITLV

KITLV　Koninklijk Instituut voor Taal-, Land- en Volkenkunde

VBG　Verhandelingen van het Bataviaasch Genootschap van Kunsten en Wetenschappen

VKI　Verhandelingen van het Koninklijk Instituut voor Taal-, Land- en Volkenkunde

Andjar Any. 1979. *Rahasia Ramalan Jayabaya, Ranggawarsita & Sabdopalon*. Semarang: Aneka Ilmu.

———. 1980. *Raden Ngabehi Ronggowarsito, Apa yang Terjadi?* Semarang: Aneka Ilmu.

青山亨. 1994.「叙事詩、年代記、予言：古典ジャワ文学に見られる伝統的歴史観」『東南アジア研究』32(1): 34–65.

青山亨・増井美佳. 2015「プルボチャロコ著『古典ジャワ文学史入門』(1)」『東外大　東南アジア学』20: 79–118.

———. 2016「プルボチャロコ著『古典ジャワ文学史入門』(2)」『東外大　東南アジア学』21: 72–102.

———. 2017「プルボチャロコ著『古典ジャワ文学史入門』(3)」『東外大　東南アジア学』22: 48–72.

———. 2018「プルボチャロコ著『古典ジャワ文学史入門』(4)」『東外大　東南アジア学』23: 108–162.

Arps, Ben. 2016. *Tall Tree, Nest of the Wind: The Javanese Shadow-play Dewa Ruci Performed by Ki Anom Soeroto: A Study in Performance Philology*. Singapore: NUS Press.

Behrend, T. E. 1995. *Sĕrat Jatiswara: Struktur dan Perubahan di dalam Puisi Jawa, 1600–1930*. (Seri INIS 23) Jakarta: Indonesian-Netherlands Cooperation in Islamic Studies.

Edi Sedyawati, I Kuntara Wiryamartana, Sapardi Djoko Damono and Sri Sukesi Adiwimarta. 2001. *Sastra Jawa: Suatu Tinjauan Umum*. Jakarata: Pusat Bahasa, Balai Pustaka.

Endang Tri Winarni. 1990. *Serat Panitisastra*. Jakarta: Departemen Pendidikan dan Kebudayaan, Proyek Penelitian dan Pengkajian Kebudayaan Nusantara.

Florida, Nancy K. 1993. *Javanese Literature in Surakarta Manuscripts. Vol. 1, Introduction and Manuscripts of the Karaton Surakarta*. Ithaca, N.Y.: Souteast Asia Program, Cornell

University.

———. 1995. *Writing the Past, Inscribing the Future: History as Prophecy in Colonial Java*. Durham and London: Duke University Press.

———. 2000. *Javanese Literature in Surakarta Manuscripts. Vol. 2, Manuscripts of the Mangkunagaran Palace.* Ithaca, N.Y.: Southeast Asia Program, Cornell University.

———. 2012. *Javanese Literature in Surakarta Manuscripts. Vol. 3, Manuscripts of the Radya Pustaka Museum and the Hardjonagaran Library*. Ithaca, N.Y.: Southeast Asia Program, Cornell University.

深見純生. 2012a. 「ババッド・タナ・ジャウィ（1）：第 1 部　ババッド・パジャジャラン」『国際文化論集』45: 145–163.

———. 2012b. 「ババッド・タナ・ジャウィ（2）：第 2 部　ババッド・マジャパヒト」『国際文化論集』46: 55–78.

———. 2012c. 「ババッド・タナ・ジャウィ（3）：第 3 部　ババッド・ドゥマック」『国際文化論集』47: 335–357.

———. 2013. 「ババッド・タナ・ジャウィ（4）：第 4 部　ババッド・パジャン（1）」『国際文化論集』48: 135–160.

———. 2014a. 「ババッド・タナ・ジャウィ（5）：第 4 部　ババッド・パジャン（2）」『国際文化論集』49: 231–258.

———. 2014b. 「ババッド・タナ・ジャウィ（6）：第 4 部　ババッド・パジャン（3）」『人間文化研究』1: 161–185.

———. 2015a. 「ババッド・タナ・ジャウィ（7）：第 5 部　ババッド・マタラム（1）」『人間文化研究』2: 461–491.

———. 2015b. 「ババッド・タナ・ジャウィ（8）：第 5 部　ババッド・マタラム（2）」『人間文化研究』3: 147–174.

———. 2016a. 「ババッド・タナ・ジャウィ（9）：第 5 部　ババッド・マタラム（3）」『人間文化研究』4: 299–322.

———. 2016b. 「ババッド・タナ・ジャウィ（10）：第 5 部　ババッド・パジャン（4）」『人間文化研究』5: 99–122.

———. 2019. 「ババッド・タナ・ジャウィ研究序説」『人間文化研究』10: 175–208.

Haryana Harjawiyana. 1985. *Serat Dewaruci, Jarwa Sekar Macapat*. Yogyakarta: Departemen

Pendidikan dan Kebudayaan, Proyek Penelitian dan Pengkajian Kebudayaan Nusantara (Javanologi).

Kamajaya. 1964. *Zaman Edan, Suatu Studi tentang Buku: Kalatida dari R. Ng. Ranggawarsita*. Yogyakarta: U. P. Indonesia.

———. 1977. *Serat Paramayoga*. Yogyakarta: Yayasan Centhini Yogyakarta.

———. 1985. *Lima Karya Pujangga Ranggawarsita*. Jakarta: Balai Pustaka.

———. 1985–91. *Serat Centhini*. 12 vols. Yogyakarta: Yayasan Centhini Yogyakarta.

———. 1993–97. *Serat Pustakaraja Purawa, Vol. 1–4*. Yogyakarta: Yayasan Centhini Yogyakarta.

Kunst, Jaap. 1949. *Music in Java: Its History, Its Theory and Its Technique*. 2 vols. The Hague: Martinus Nijhoff.

Kuntara Wiryamartana, I. 1990. *Arjunawiwāha: Transformasi Teks Jawa Kuna lewat Tanggapan dan Penciptaan di Lingkungan Sastra Jawa*. Yogyakarta: Duta Wacana University Press.

Mangkunegara IV. 1990. *Serat Wedhatama: An English Translation*. Tr. by Stuart Robson. Leiden: KITLV Press.

松本亮. 2009.『ワヤン・ジャワ、語り集成』東京：八幡山書房.

McDonald, Barbara. 1983. "Kawi and Kawi Miring: Old Javanese Literature in Eighteenth Century Java." PhD diss., Australian National University.

———. 1986. *Old Javanese Literature in Eighteenth-century Java: A Consideration of the Processes of Transmission*. Clayton: Monash University Centre of Southeast Asian Studies Working Paper no. 41.

Pigeaud, Th. G. Th. 1967–70. *Lieterature of Java*. 3 vols. The Hague: Martinus Nijhoff.

Ras, J. J. 1979. *Javanese Literature since Independence: An Anthology*. (VKI 88). The Hague: Martinus Nijhoff.

———. 1992. *The Shadow of the Ivory Tree: Language, Literature and History in Nusantara*. (Semaian Series 6). Leiden: Vakgroep Talen en Culturen van Zuidoost-Azië en Oceanië, Rijksuniversiteit te Leiden.

———. 2014. *Masyarakat dan Kesusastraan di Jawa*. Jakarta: Yayasan Pustaka Obor Indonesia.

Ricklefs, M. C. 1974. *Jogjakarta under Sultan Mangkubumi, 1749–1792: A History of the Division of Java*. London; New York: Oxford University Press.

———. 2017. “The Yasadipura Problem.” BKI 153 (2): 271–283.

———. 1998. *The Seen and Unseen Worlds in Java, 1726–1749: History, Literature and Islam in the Court of Pakubuwana II*. St. Leonards: Allen & Unwin.

———. 2008. *A History of Modern Indonesia since c.1200*. 4th ed. Hampshire; New York: Palgrave.

Soebardi, S. 1975. *The Book of Cabolèk: A Critical Edition with Introduction, Translation and Notes*. The Hague: Martinus Hijhoff.

Soewito Santoso, Fendi Siregar, Kestity Pringgoharjono. 2006. *The Centhini Story: The Javanese Journey of Life*. Singapore: Marshall Cavendish Editions.

Sudewa, A. 1991. *Serat Panitisastra: Tradisi, Resepsi, dan Transformasi*. Yogyakarta: Duta Wacana University Press.

Sudibjo Z. Hadisutjipto. 1980. *Serat Cemporet*. Jakarta: Departemen Pendidikan dan Kebudayaan, Proyek Penerbitan Buku Sastra Indonesia dan Daerah.

菅原由美. 2013.『オランダ植民地体制下ジャワにおける宗教運動：写本に見る 19 世紀インドネシアのイスラーム潮流』吹田：大阪大学出版会.

豊田和規. 1996.「『マニック・モヨ』—ジャワ創造神話」『南方文化』23: 79–98.

———. 2008.「ジャワの宮廷詩人ロンゴワルシトの『スラット・チュンポレット』」『南方文化』35: 79–99.

———. 2017.「ロンゴワルシトのジャワ神統記『パラマヨガ』(その 1)」『東京外大　東南アジア学』22: 73–116.

———. 2018.「ロンゴワルシトのジャワ神統記『パラマヨガ』(その 2)」『東京外大　東南アジア学』23: 77–107.

———. 2019.「ロンゴワルシトのジャワ神統記『パラマヨガ』(その 3)」『東京外大　東南アジア学』23: 135–155.

Uhlenbeck, E. M. *A Critical Survey of Studies on the Languages of Java and Madura*. ’s-Gravenhage: Martinus Nijhoff.

Winstedt, Sir Richard. 1969. *A History of Classical Malay Literature*. London; Kuala Lumpur; New York: Oxford University Press.

———. 1991. *A History of Classical Malay Literature*. 3rd ed. Revized by Y. A. Talib. Kuala Lumpur: Council of the Malayan Branch of the Royal Asiatic Society.